
放浪のプリンス

入川出水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放浪のプリンス

【Zコード】

Z9067Q

【作者名】

入川出水

【あらすじ】

帝國の第一皇子として生まれたクレミーは、なぜか皇家直系の証である銀髪碧眼ではなく黒髪黒眼の子だった。時は流れて、十八歳の春。クレミーはふとしたきっかけから生家である皇城を捨て、あてもない旅に出ることを決心する。どこか頼りない皇子がゆく剣と魔術の放浪ファンタジー。

「陛下、これは一体……」「黒い……禍々しいほどに」

皇城の一角落にある皇妃の私室で産声が上がった。中央セントラルバー＝ア帝国第一皇子の誕生の瞬間だった。新たな命を祝福すべきこの時に、しかしお産に立ち会つた重臣達は一様に息を飲んだ。その原因は生まれたばかりの赤ん坊の容姿にあつた。

薄つすらと生えた頭髪と、穢れを知らぬその両眼は、まさしく闇を象徴するかのような漆黒色。皇家直系の証であるはずの銀髪碧眼には似ても似つかなかつた。瞬時にそれを察知した重臣達が落ち着きなく騒ぎ立て始める。

「あり得ぬぞ。黒の血統などござるにもないはずだ」

「もしや、種違いでは」

「貴様、なんと無礼なことを……」

「しかし、それ以外に説明できまい」

「だが、皇妃様に限つてそんなことは」

それらに耳を傾けながら、第七代皇帝グスタフ・ドイルは押し殺すような表情でしばし口を閉ざしていた。どれほど時間が過ぎただろうか。一同の注目が集まる中、黙りこくっていたグスタフが苦々しげに言葉を吐き出す。

「この赤子は余の子ではない」

「陛下……？」

「忌々しい。まるで悪魔の子のようではないか」

グスタフは不快感に顔を歪ませると、それきり寝室を出て行つてしまつた。残された重臣達はどうしようもなく立ち尽くし、後には赤子の求めるような泣き声だけが響いた。

はたして求めていたのは正統な皇子という地位か、それとも親子としての自然な愛情か。

十八歳になつた今では、当時の胸中など分かるはずもなかつた。

*

クレミーは目を覚ました。どうやら夢を見ていたようだ。
天蓋付きの寝台で休む皇妃マージヨリーの横に座りながら、クレ
ミーはあるはずのない出生の記憶を手繰り寄せた。

十八年前のあの日、ここでの世に生を受けたのだ。そして名前
を、帝都に伝わる神話に登場する破壊と災厄をもたらす黒い竜『ク
レミー』からとつて付けられた。髪と眼の色が黒いというだけの理
由でだ。本来ならば人の子に付けるような名前ではないだろう。そ
の子に対して、少なからず愛情を抱いていたとすれば。

「……クレミー？」

ならば父は自分に対して愛を感じていなかつたということだろう
か。生まれてこの方、一度たりとも父に優しく接してもらつたこと
はなかつたが、それでも肉親である父を恨んだことはなかつた。当
たりが厳しいのも皇子としての気質を養わせるための措置であつて、
つまりは遠回しの愛であると信じていた。

だが、それもう限界だらう。

「クレミー、聞いているの？」

なにせ今年で成人を迎えるのだ。いっぽしの大人になる。いつま
でも子供じみた願望を握り締めていても、父は応えてはくれないの
だ。

すなわち父は自分を愛してなどいない。いや実の息子とすらも思
つていないのかもしれない。そう考えれば、父の生来の、他人行儀
さえ逸脱した明らかな嫌悪を含む冷たい振る舞いにも納得がいく。

「クレミー！」

自分の名を呼ぶ声にクレミーはぱつと顔を上げた。

「申し訳ありません、母上。少し考え方をしておりました」

マージョリーは上半身だけ起き上がる。

「母上！　お体の方は

「大丈夫よ」

言葉を途中で遮り、真っ直ぐにクレミーの目を覗き込む。マージョリーの青い瞳に黒が重なる。

「グスタフのことね？」

いきなり核心を突かれてクレミーは戸惑ってしまう。

「……はい、その通りです。どうして分かったのですか？」

「私はあなたの母よ。あなたの考えていることくらい分かるわ」

だから、それがなぜかを聞いているのに。クレミーはいささか腑に落ちなかつたが、食い下がつても仕方がないので話を続けることにした。

「僕　　いえ、私は、」

「そんなに堅くならなくていいのよ。私達は血の繋がった家族なのだから。肩の力を抜いて」

「はい、母上。このようなことをお聞きするのはこの上なく背理だと心得ているのですが」

「いいわ。なんでも話してみなさい」

「僕は……父上に愛されていないのでしょうか？」

ああ、ついに言ってしまった。今まで常に傍らに用意していくながらも、意識的に考えることを避けてきた疑問。その答えを知りたくて知りたくて仕方がない反面、いざ知つてしまつた時の自分を想像して臆病になつていた。口に出さなければ差し当たり現在の父との関係は保たれるが、それでは不安が募る一方だ。だからといって、言えはどうなるというわけでもない。

結局、答えを知りたいだけなのだ。だが、その答えは既に心のどこで出しているような気もした。

僕はどんな返事を期待しているのだろう。クレミーには自分自身がわからなかつた。

「『愛されていないのでしょうか』と聞くところとは、少なくともあなたは愛されていないと感じているのね」

「いえ、それは」

「遠慮することないわ。ここにはあの人はいないもの」

母上には敵わないな。クレミーはすべてを吐露することに決めた。

「……生まれてこの方、父の愛を感じたことは一度もありません。それどころか、はつきりと憎しみや疎みの念が伝わってきます。そしてその原因が、この、」

クレミーが右手を上げて前髪に触れる。

「この、不気味なまでに黒い髪と瞳にあるのも理解しているつもりです」

そこまで言い終えると、マージヨリーの反応を待つた。

大方は予想通りだつたのか、マージヨリーは落ち着いた様子でクレミーの言葉を受け止めていた。しばらく俯いて逡巡した後、覚悟を決めたように顔を上げると、包み込むようにしてクレミーの両手を握つた。

「よく聞きなさい、クレミー」

マージヨリーのただ事ではない声色にクレミーは慌てて居住まいを正した。

「あなたは正真正銘、私とグスタフとの間に生まれた子よ。信じるか信じないかはあなたの自由だけれど、これだけは言わせてちょうだい。私はあなたを愛している」

クレミーは目を見開いた。胸の奥に温かみが広がっていく。それが喜びだと気が付いたのは、ずいぶんと時間が経つてからだつた。

「父上は……父上はどう想つてるのでしょうか」

マージヨリーは悲しげに首を横に振つた。

「きっとあなたを愛していないわ。でも、それはあの人があなたを自分の息子と認めていないからなの。私がどんなに説明しても、あ

の人は信じてくれないまま。だから、それを分かつて「

「そう、ですか」

沈黙が訪れる。

クレミーには分かつていた。あれだけ自分を邪険に扱う父に愛されているはずがなかつたのだ。それでも、そのことを口に出すのを躊躇わせてきた理由は、むしろその先にあつた。

「母上。母上のおかげで、ようやく決心がつきました

「そう」

につこりと心底嬉しそうに微笑むマージョリーに対して、クレミーは椅子から立ち上がつて気を付けをした。

「僕はこの城を出て旅立ちます」

「その意味、分かつて言つているのね」

無論、重々承知している。城を出るとは城を捨てる」と、つまりは皇家を捨てることになる。家柄も地位も何もかもをかなぐり捨て、その身ひとつで外の世界へと出発するということだ。

クレミーは力強く頷くと、石造りの天井を見上げた。

「『黒竜は全てを破壊し、人々に災厄をもたらした』。一般的にはこの句で神話が締めくくられていますが、幼少の頃の僕はそれがどうしても気に入らなくて、必死で国立図書館の蔵書を漁つたんです。そうしたら、なんとのこの話を創つた作者の手記が見つかつたのです。そこにはこう書かれています

クレミーはマージョリーに視線を下ろすと、一字一句間違えないようにゆつくりと語そらんじる。

「『……黒竜は確かに世界を滅ぼした。ただし、それは飽くまであの醜く荒れ果てた世界を無に還す役目を果たしたに過ぎない。人々はやがて根強く世界を建て直すことだらう。黒竜は破壊と災厄の象徴ではない。再建と調和の神である』」

真面目くさつて言い終えると、急に恥ずかしさが込み上げてきてクレミーは照れ隠しに笑つた。

「だから僕はあの黒竜のように、世界が間違つた方向に進んでいな

いかどうかを実際にこの目で見てきたいのです。それこそが、この
髪と眼と名を授かつた僕の使命だと思っています」

緩んでいた顔を引き締め、真摯な瞳でマージョリーを見つめる。
止められるかもしない。あんな神話を信じるなど馬鹿げている
と一蹴されるかもしれない。だが、止められたっていい。いくら母
の言葉であろうと、一度決めたことを断念するつもりは毛頭ない。
どんな非難でも受け止めるつもりで、胸を張って待つ。

マージョリーは「ふう」と小さく溜め息をつくと、諦めたように
笑つた。

「やっぱりあの人の子供ね。強情なところはそつくり。いいわ、あ

なたの好きなように生きなさい」

「母上……」

マージョリーの快い返答にクレーリーは目頭が熱くなる。

「本当はここにずっと居て欲しいけれど、の人を説得しきれなか
つた私にはあなたを止める権利はないわ。でもね、」

マージョリーは半ばベッドから這い出るよつこじてクレーリーの面
肩を掴むと、縋るような表情で告げる。

「絶対に死んではダメよ。何が起きよつと、決して。約束できる?」

「……約束します」

「それが分かっているなら、もつ私から言つことはないわ。行つて
らつしゃい。ちゃんとフレディには挨拶するのよ」

肩から手が離れる。不思議と身体が軽くなつたよつな気がした。

「もちろんです。では、行つて参ります」

*

必要最低限の荷物をまとめて、旅装に着替える。上が袖無しの黒いインナーシャツに肘までの黒のロンググローブ、下が黒のレギンスと膝までのカーキのパンツという井出達だ。なるべく目立たないように地味なものを選んでいたら黒ばかりになってしまった。髪色と合つてちょうどいいかと思ったのは鏡の前で合わせてからだつた。準備を終えたクレミーは一歳離れた兄であるフレディの部屋の扉をノックした。

「おう、どうぞ」

「失礼します、兄上」

フレディは入口に背を向けて机に座り、何やら分厚い書物に目を走らせていたが、訪問者がクレミーだと分かると笑顔で迎えた。

「どうした。お前の方から俺を訪ねて来るなんて珍しいじゃないか」「実は、折り入つてお話がありまして」

そこでフレディは初めてクレミーの格好に目を向けた。

「どこかへ出かけるのか」

「はい。当分は帰らないつもりです」

「うーむ、そうか。……どうやら賭けはお袋の勝ちみたいだな」「え？」

フレディはおもろしくなさそつに眉をしかめると、立ち上がってちょいちょいと手招きした。クレミーは訳が分からず近寄ると、フレディは無言で一番大きな引き出しを指差した。

開けてみるという意味だろうか。クレミーはおずおずと取っ手に手を掛けると、ゆっくりと引いた。中には、難解そうな啓蒙書や文献と一緒に小さな巾着が大切そうに納められていた。

フレディは横からひょいと巾着を摘み上げると、口を緩めて中身を机の上にあけた。入っていたのは銀の鎖に深青色の宝石が付いた綺麗な首飾りだった。

「これは？」

「ああ、皇家に伝わる由緒正しきネックレスだ。鑑別として持つていけ。ついでに、この袋もやるよ」

フレディは首飾りが入っていた巾着をクレミーに手渡し、それから首飾りを掛けてやつた。

「ところで兄上、賭けとはどうこいつ……」

「なに、以前にお前について話したときにお袋が提案したのや。『近々、クレミーが旅立つと思うから、その旅費を賭けないか』ってな。それで俺はお前が城に残る方へ、母さんは逆へ賭けた。んでもつて俺の完敗だ。まったく……」

フレディは上着のポケットに手を突っ込むと、『ジャパン』と中を漁つた。出てきたのは紙幣と硬貨が数枚ずつとこいつ見るからに頼りない額だ。

「悪い。今、金ねえわ……」

「いえ、お気になさらずに。この日のために色々と準備をして参りましたから、僕のほうでも多少は持ち合わせが『じゃりますので』『はは、じつや参つた。まあ、少ないけどこれはもうらつてくれよ』

クレミーの手の中の巾着に乱暴に貨幣を押し込む。

「ありがとうございます」

「……なあ、クレミー。親父のところへは行かないのか?」

少し言ひにくそうにフレディが尋ねる。その質問を予想していたクレミーは、あらかじめ用意していた解答を口にする。

「この城の門をくぐつた瞬間から僕にとって父上は父上でなくなります。ですから、挨拶するつもりもありませんし、名残惜しさも感じません」

「そ、そうか。ってことは、俺もお前の兄貴じゃなくなっちまうんだな。じゃあ、これからは『兄上』じゃなくて、『フレディ』と呼

べ! ほり、呼んでみ

「フ、フレディ……さん

「『わん』はいらん

「フレディ上……」

「おかしいだろ! ……まあいい。気張つて行けよ、フレディ……」

「はい、フレディ!」

嬉しそうに声を張り上げたクレマーは颯爽と部屋を後にした。

「あーあ、行つちまつたか。俺が皇帝になつた暁にはあいつを参謀に付けようと思つてたのになあ……」

窓の外、城門に向かつて前庭を歩いていく愛弟の背中を眺めながら、フレディは未練たらたらに呟いた。

「……『兄でなくなる』と言つたのがそんなに寂しいんですか？」

どこからか声が響いた。

次の瞬間、虚空に紫電が走り、瞬く間にそこに人間が立ち現れた。だぼだぼのローブに身を包んだ長身の男、魔術師アレンは伸びっぱなしの髪の隙間からフレディの様子を窺つた。

「アレンか。なんというか、寂しいとかそんなんじゃなくてな。こう、あるべきものが無くなつちまう感覚っていうのかな。とにかく落ち着かないんだよ」

フレディの拙い説明にアレンは呆れ返つたとでも言わんばかりに大きな溜め息をついた。

「あのですねえ。それを世間一般に『寂しい』と言つんですよ。もしかして知らなかつたんですか？」

「やかましい！ お前はさつさと頼んどいたことをやつてこい！」

「はいはい」

現れた時と同じように雷を纏つてアレンの姿が消える。

フレディは革椅子にどっかりと腰を下ろすと、窓越しに空を仰ぎ見た。春の抜けるような青空に、ぽつんと一つ雲が浮かんでいる。まるで外の世界に放り出された弟のようだ。フレディは少しばかりクレミーが心配になつた。

するとその雲に重なるように小さな影が現れた。アレンだ。

アレンはローブの中から複雑に捻じ曲がった木杖を取り出すと、天に向かつて掲げた。それに応えるように先に付いた水晶に赤い光が灯まる。光の尾を牽くようにして杖を振り下ろすと、先端から大量に微細な光球が生まれた。光球はふわふわと空中を無秩序に漂つ

ている。

地上を行くクレミーが城門をくぐると、待っていたかのような頃合いで光球の一つが爆発した。それはちょうどクレミーの真上に当たる場所だった。

クレミーが頭上を見上げる。

おびただしい数の光球は続けざまに破碎し、次から次へと誘爆を引き起こす。小刻みに鳴り響く小気味良い破裂音は、さながら門出を見送る癪癩玉のようだった。

「アレンさん……どうしてここに？」

目を丸くしたクレミーがおそるおそる尋ねる。それも当然だ。アレンは若くして魔術を極めた世界でも五本の指に入るといわれる実力者。セントラルバニアの英雄とも呼ばれ、帝国直属の魔術師団の先頭に立つ人物だ。そのような伝説級の偉人が、たとえ相手が皇子だとしても、クレミー程度のためにわざわざ時間を割くとも思えなかつた。

「僕は頼まれただけですよ。どこかの寂しがり屋さんに、ね」

アレンがちらりと、一部始終を息を飲んで見守っているフレディの方を振り返った。反射的にフレディは窓枠から飛びのいて身を隠したが、クレミーの目はその姿を逃さなかつた。

「兄さん……」

「ええ。素直に見送ればいいものを。寂しがりなだけじゃなく、きっと恥ずかしがりなんですねえ」

「昔から素直にものを言えない人でしたから」「ほほほう。それは興味深い話ですね」

二人が何事か談笑している。フレディは耳をそばだてたが、距離があるので内容までは聞き取れなかつた。が、どうしてか自分の話題で盛り上がりがつているということだけは直感で分かつた。

「そろそろ行きますね、アレンさん」

「はい。私もこんな戯れで引き止めて申し訳ありません」と言いつつもアレンの顔に反省の色は見られない。

どこまでも掴めない人だ。クレリーは口元をゆるめ、静かにアレンに背を向けた。

「次に会う時には、アレンさんに引けを取らないくらいの強さを身に付けているつもりですか？」

「おお、それは楽しみですね」

「それでは、さようなら！」

元気に別れを告げ、クレリーは一步を踏み出す。田の前には、終わりが見えないほどに果てしなく長い下り階段が続いている。それが皇城が建つ高台と城下街とを繋ぐ唯一の交通手段である。そのわずかな段差を一つ下るたびに、自分が皇子という身分から引きずり下ろされるような錯覚を覚えた。だが、不思議と嫌な気持ちはしなかつた。

ずっと出たかったんだな。

こぎ出発してみて気付いた。自分は初めてからこいつなることを望んでいたのだと。

生家である皇城を離れ、こぎして外界へと歩を進めていくことがとてもなく心地よいのだ。閉塞も拘束も緊張もない、ひたすらに自由な世界はこの上なくクレリーを惹きつける。

「ああ、世界はこんなにも

広いんだ。

act - 02 旅立ちの午後

永遠に続くかと思われた直線階段を下り終え、城下街に着いた。正門へと延びる大通りをあてもなく歩いていると、クレミーの姿に気付いた通行人がわらわらと集まつてくる。

「皇子様！ どうしたんだい、こんなとこで。お父様に勘当されちまつたのかね」

「あらあら、お可哀想に。クレミー様には日頃からよくしていただいてますからね。もしお困りでしたら、遠慮なくうちへお泊まりなさいてくださいな」

「おお、皇子さんじやないか。どうだい、剣はいらないかい」

クレミーの見たことのある顔ぶればかりだ。というのも、日頃から城内で居心地悪く過ごしていたクレミーはしばしば城を抜け出しては城下街へと繰り出していたため、街の人間と懇意になっていたのだ。いずれも脱走の手助けをしてくれたのはマージョリーかフレディで、グスタフには知られていない秘密の一つだ。

「ここにちは、皆さん。僕、旅に出ることにしたんです」

クレミーの言葉に、衆人はあんぐりと口を開けた。

「旅つて……皇家はどうするのさ」

「捨てます」

力チンという擬音が聞こえてきそうな勢いで人々の表情が固まつた。あまりにも反応がよすぎて、クレミーは内心笑いをこらえるのに必死だった。自分がクイズの答えを知っているのような優越感が愉しかった。

「僕はもう皇子ではなくなりました。ですから、皆さんも年齢相応に接してくれて構いませんよ」

クレミーがにこりと笑うと、人々は翻訳者を求めるようにお互いの顔を見合せた。唐突な告白に戸惑いを隠せていない様子だ。人だからに気付いた人がさらに寄つて来て、ざわざわと人々の囁き声

が溢れかえった。

このままここに腰座るのもおもしろそうだが、それではいつまで経つても出発できそうにない。仕方なくクレミーは逃げを打つ。

「武器屋のおじさん。僕に剣を見せてもらいますか?」

クレミーの目の前にいた武器屋の店主はしばらく自分が呼ばれているとも気付かずに行っていたが、はっと我に返ると「お、おう」と慌てて店の方へと案内した。

観音式の扉をぐぐると、金属特有の鉄臭さが鼻を刺激した。大通りに面する比較的大きな店舗だが、閑古鳥が鳴いている。

「この」時世、武器なんて必要とするのは冒険者くらいなものだあ」

クレミーの表情を読み取った店主が自嘲気味に笑った。クレミーは返す言葉が見つからず、逃げるよう陳列棚を眺めた。短剣、長剣、曲剣、細剣、刺突剣、大剣、投げ短剣、槍、薙刀、戦斧、鎌、鉤爪、棍棒、鞭、杖……と国隨一の武器屋ともあってその種類は豊富だ。

「つちは鍛冶屋じゃないからな。あんまりいいモンは揃っていないよ」

「心配なく。使う武器を選べるほど、僕はまだ熟達していませんから」

「ははは、そうかい。……それにしても、さつきは『冗談で剣をいらないかと聞いたが、」

店主は顎の無精髭を弄りながら、意外そうな顔で切り出す。

「剣術なんて、一体どこで習つたんだい?」

「今は亡き祖父に習いました」

「なんと、あの偉大なる武帝デミトリアス・ドイル様から直々にか!

「こりやたまげたもんだ!」

店主は目を見開いた。

デミトリアスは現役時代、つまりかつてセントラルバニアが西の大國ウエスターと戦乱の状態にあった時分に、自ら先陣を切つ

て戦場を駆け回った武帝だ。じきに休戦協定が結ばれ、現在はお互に牽制し合う緊迫した関係を保つているが、それでも束の間の平和を切り拓いたのはまぎれもなくデミトリアスの手腕であった。そのあたりの史話をよく知っている世代の店主にとつては、デミトリアスは尊崇の対象であるのだろう。

クレミーは幼少の頃に世話になつた祖父の、柔らかな笑顔とたくましい一の腕を思い出しながら、誇らしげに口元を緩めた。

「ええと。じゃあ、これでお願いします」

「あいよ。ん？ そんなに細いのでいいのかい」

クレミーが指差していたのはウォーキングソードと呼ばれる刃渡り六〇センチほどの軽量細身の片手剣だつた。レイピアを小さくしたような外見で、質素な橜円形の鍔ガードと申し訳程度に付けられた護拳ナックルガードはいかにも量産品といったふうだ。貴族の装飾具としても用いられる剣だが、この店の品は実用を目的としているらしく柄に装飾は見られない。

訝るような視線に、クレミーはこくりと頷いた。

「ええ。僕はそれほど力がありませんから」

店主はちらりとクレミーの腕を見た。決して太い方ではないが、鍛錬によって洗練されて引き締まった筋肉からはとても非力には見えない。単に軽い剣を好むのか、それがデミトリアス流なのかは判然としないが、どちらにしろ客の注文には従わなければならぬので、渋々在庫から新品を取り出した。

「はいよ、皇子さん。ウォーキングソード一本で八〇〇〇ギル。剣帯はおまけだ」

「もう皇子じゃないですってば」

クレミーは鞘に納められた剣と代金を引き換える。

フレディから受け取つた資金にはまだ手をつけないでおいた。これは本当に困つたときに使うつもりだ。

「これから防具を見に行くのかい？」

「えつと、防具まで買うとお金が無くなつてしまつので、しばらく

は買わないつもりです」

「ふーむ、それは頼りないな。おお、そうだ。実は俺にはあんたくらいの年の馬鹿息子がいてな。そいつはある日突然、『俺は冒険者になるんだ』って家を出て行っちまつたんだが……。まあ、それで、そん時に置いていった軽鎧があるんだ。これが勝手に売ることもできなくて困っていたところでな。もう随分と長い間帰ってきていないし、あんたさえよければもらってくれないか？ 体格も大して変わらないようだし」

「本当ですか！？ ゼひいただきたいです！」

クレミーがぱっと顔を輝かせると、店主は我が子を懐かしうるに優しく田を細め、店の奥から木箱を運んできた。

クレミーは木箱に入っていた胸、肘、膝当てを身に付け、左手首に小型のバックラーを装着すると、剣帯の左に鞘を吊るした。さらに荷物の中からぐるぶしほどまである漆黒のロングマントを取り出して羽織り、フードを被つて前ボタンを閉める。

「これで立派な冒険者だな。にしても、顔まで隠す必要があるのかい？」

「この街では僕は田立ちすがるようなので、こうしたこと色々と面倒なんですよ」

ああ、と店主は先程のちょっとした騒動を思に出して合点がいった。

「このことを知らない奴らには、俺から云々としてやるよ」「助かります。では！」

クレミーは店主に頭を下げると、観音扉を開けて外に出た。午後の突き刺すような日差しの中では、全身を覆つほど の真っ黒いマントは少しばかり暑苦しかった。

セントラルバニアの街は広い。皇城が南向きに建つていて、南門が正門にあるのだが、皇城前の階段下からその正門に向かつて大通りを直進しても徒步で約十五分は掛かるほどだ。クレミーは故郷の街並みを見納めるようにして歩き、やつとこを正門に辿り着いた。関所の役人に何か咎められるかとも思つたが、案外引き止められることはなかつた。

門を抜けて魔物避けの柵までやつて来ると、クレミーは脱ぎ捨てるようにしてマントを外した。正直、暑くて敵わない。さらに、ここからは魔物の襲撃も考えられる。剣を抜きにくい格好は極力避けるべきだろう。

クレミーはマントを畳んでリュックに詰めた。そこでフレディにもらつた巾着の存在を思い出し、剣帯の鞘とは反対側に提升了。歩くたびに中で鳴る硬貨どうしがぶつかり合う音が楽しい。

「まずはサウサーを田指そう」

南国のサウサーは年中高温多湿の熱帯であることで有名だ。季候を利用した果樹栽培が盛んで、セントラルバニアの市場に並んでいる果物もほとんどがサウサー産である。さらに大陸の端ということもあって海に面しており、ビーチ目的の観光客でも賑わっているという。

クレミーはあれこれ想像を膨らませながら、小麦畑に挟まれた街道を歩いていく。馬術を嗜んでいるので移動手段に馬を使うことも考えたが、購入費も維持費もばかにならないため即座に却下された。見渡す限りでは魔物の姿はない。大陸中央部の魔物は他の地域に比べて弱く、集団性も低い。決して油断はならないが、めったに街道には現れることがないのでそこまで気張る必要もない。それを教えてくれたのは祖父だった。

今思えば、どうして祖父は自分にそのようなことを覚えさせてい

たのか。剣の稽古の合間の雑談にしてはかけ離れている気がするし、皇子にとつての将来に役立つような話でもない。まるでクレミーが城を出ることを知っていたかのようだ。

まさかと思う反面、あの奇想天外な祖父ならあり得るとも確信していた。それほど捉えどころのない人物だった。人間性だけならアレンに似ているかもしれない。

数十分ほど歩いたどうか。分かれ道に出くわしてしまった。右か左かの一択だ。地図等は用意してきていないので、どちらがサウサーに向かう道なのかは判らない。だからといって、街道を外れて真っ直ぐなんていうのは論外だ。

だが、幸いにも分岐点には立て札が立っていた。ミミズが這つたような乱雑な字で、板に直接文字が書かれている。

『みぎ……まもの。ひだり……あんぜん』

「これ、誰が書いたんだろう」

とても大人の字とは思えなかつた。少なくともセントラルバニアの役人はここまで煩雜な仕事はしない。ここは既に隣町の管轄なのだろうか。

「でも、左に行くしかないか」

魔物がいるといわれてそちらに向かうほどひねくれてはいないし、自信過剰でもない。こと魔物に関しては図鑑上の知識しか持ち合っていないクレミーにとっては、いくらこの辺りの魔物が貧弱とはいえ脅威であることには変わりはないのだ。デミトリアスに習つた剣術だつて使つていたのは模擬剣で、しかも相手は人間だ。魔物にも通じるとは限らない。

右の道はこれまでと同じ穩やかな平原、左には青々しい森林が生い茂つている。森の中は薄暗く、道も狭いが、魔物に出遭うよりはずつとましだ。

むしろ涼むのにはちょうどいいなとクレミーは意気揚々と左の森へ入つて行つた。入口の木にぶら下がつていた『本物』の看板が裏返されていたのにも気付かずに。本来ならば、そこにはこう書

かれていたのが見て取れただろう。

『コノ先、エルフノ森。人間ハ立チ入ルベカラズ』

何も知らないクレミーは鼻歌混じりに森の奥へと歩を進めていく。その様子を薄闇から覗く目が六つ。機会を窺うようにひつそりと森と同化していた。

まだらに降り注ぐ春の木漏れ日が地面に網目模様を映し出す。新緑の生い茂った森の空気は濾過したように澄んでいた。それらを肺いっぱいに吸つてみると、身体の内側から浄化されるようだつた。クレミーは消えかけた街道を陽気に走つていく。樹木を切り倒して作られた人工の小道はほど整備が行き届いていないのか、進むにつれて徐々に大自然に飲み込まれつた。

それにしても、思つた以上に森は長い。旅立ちの準備を手伝つてくれた侍女に聞いたところ、一、二時間も歩けば隣町に着くと言つていたのだが、もうかれこれ出発してから三時間は経つてゐる。外を歩き慣れていないという理由だけでは説明できない遅延だ。

そろそろ日が傾き始めている。

幸いにも今のところ魔物との遭遇はなく、またこんなにも穏やかな自然の中に凶悪な魔物が棲んでいるとも思えなかつた。すつかり緊張感をなくしてしまつたクレミーは終いには目を閉じて、時折聴こえてくる鶯の歌声に耳を傾けながら、安らぎに身を任せた。

しばらく足を運ぶと、進路上に大きな倒木を発見した。街道を断つように横倒しになつてゐるその高さはクレミーの身長を超えてゐる。どうやらかなりの巨木のようだ。

クレミーは眼前に『そびえ立つ』大木を見上げて、自分が小人に変身してしまつたかのような感覚に陥つた。倒れている木に『立つ』という表現を使うというのも妙だが、それほどまでにスケールが大きいのだ。

クレミーは倒木を避けようと左右に回り道を求めたが、ここからでは折れ目も頂上も木々に隠れて確認できない。どこまであるかも分からぬ大木を当てにして、草木が鬱蒼とする深い林の中を搔き分けながら迂回するのは得策とは思えなかつた。

悩んだ挙げ句、結局、目の前の巨木を乗り越えて行くことに決め

た。クレミーは片肩に提げていた荷物を先に幹に上げると、木の端に手を掛けた。

「あれ」

こぞ登ろうとして気が付いたのだが、樹皮の表面に足場にするための取つ掛かりがいくつか彫り込まれている。おそらくこの道を頻繁に行き来する冒険者か商人かが作ったものと見てまず間違いないだろう。

ありがとうございますと心中で謝辞を述べながら、クレミーは腕に力を込めて身体を浮き上がらせた。そのまま取つ掛かりを利用して一気に登ろうと頭上を振り仰いだその時、空を切り取る太い枝の上に、手に『何か』を持った小さな影を認めた。

「やあああっ！」

その瞬間、影は枝から飛び降りてその『何か』を思い切り振り下ろした。落下の勢いに合わせて落とされたそれは頑丈な木の棒の先に鋭利な石をくくりつけて作ったハンドアックスだった。

先に動いたクレミーは即座に倒木から手を離して間一髪その攻撃を避けた。石斧がクレミーの登ろうとしていた樹面をえぐる。

「くそ、二ンゲンめ！」

奇襲の失敗を悔しがる声に、何者だとクレミーが幹の上を睨みつけると、攻撃を掛けてきたのはまだ年端もいかぬ少年だった。ただし、その耳は人間のそれよりも長く、尖っている。

「……エルフ！？」

「今だ！ おまえたち、やれえ！」

エルフの少年が叫ぶと、クレミーの両脇の草むらからもう一人仲間らしき少年が飛び出してきた。どちらも同じく石斧を持ってクレミーに襲い掛かる。

「おつとー！」

クレミーは右側から横薙ぎに振られた石斧を数歩距離を取つて躊躇^{かわ}すと、間髪入れず左側から飛び掛ってきた少年の振り上げた手を掴む。さらに少年の手から斧を払い落とすと、背中側に回り込んで少

年の右手を後ろ手に締め上げ、左手を少年自身の首筋に回して押さえつけた。

「いてえ！ 離せよ！」

「動かないでください！」

クレミーが声を張り上げると、三人の少年はぎくりと動きを止めた。

「……あなた達がどうして僕を襲つたのかは知りませんが、自分を殺そうとしている相手に情けを掛けるほど僕はお人好しではありません。それでもまだ向かってくるのなら容赦はしませんよ」

剣帯に吊るした長剣ウォーキングソードが音を立てる。捕らえられた少年がびくりと全身を震わせた。

クレミーが他の二人の方に鋭い眼差しを向けると、彼らははっとして構えていた石斧を電気でも走つたみたいに慌てて地面に放り投げた。

ふう、と安心したクレミーはあらためて目の前の少年を見た。エルフの寿命は人間の何倍もあると聞いたことがあるので實際には判らないが、外見だけでいえば人間の十歳ほどだろうか。その吸い込まれるような瞳には一点の穢れも見出せなかつた。

何か事情があるのかもしない。

「大丈夫。戦う気がないのならあなた達を傷つけたりはしませんよ。ただ、このまま見過ごすのは襲われた僕の気が済みませんから、何か訳があるなら話してもらえませんか」

クレミーが優しく諭すと、地上にいる少年は半べそになりながらこくこくと首を縦に振り、取り押さえられている少年は目を伏せて黙りこくつた。しかし、初めに襲ってきた少年だけは木の上から気丈にもクレミーを睨み付け、それから勝ち誇つたように笑つた。

「おい二ングン。これ、なーんだ」

少年は見せ付けるように手に持つたリュックを揺らした。それは先に幹の上に乗せておいたクレミーの手荷物だった。もちろん中には携帯食料や現金が入っている。

「あ、ちょっと、その鞄は……」

「えいっ！」

「うぐつ……」

一瞬拘束の力を緩めた隙に、押さえていた少年が離れてクレミーの鳩尾に肘打ちを喰らわせた。完全に不意を衝かれたクレミーは痛みに片膝をつく。

「ずりかかるぞ……！」

鞄を持ったリーダーらしき少年の合図で三人は森の奥へと駆け出した。あの巨大な倒木をまるで飛び箱でも跳ぶように軽々と飛び越え、たちまち森の茂みの中へと姿を消してしまった。

「うひ……」

腹部の鈍痛と、年少者にしてやられた情けなさとでクレミーはしばらく立ち上がることができなかつた。子供だと思って寛容な態度で接した結果がこれだ。無様この上ない。

でも、どうしてこんなところにエルフがいるんだろう。

ふと不思議に思ったその時、クレミーがやって来た街道を同じようにつけてくる者がいた。ちらりと田を向けると、どうやら若い女のようだった。年齢はクレミーと同じかそれ以下か。もっとも、何よりも気になつたのは彼女もまたエルフ族であるという点なのだが。狩りの帰りだろうか。動きを阻害しないために露出の多い格好をしたエルフの少女は背中に大きな弓を携え、肩には討ち取つた魔物を担いでいる。毛皮と食料に使うモリギツネだ。

クレミーはおもむろに立ち上がって剣の柄に手を掛ける。相手は弓手で、しかもまだ武器を構えてはいない。もう先程のようなへまはしないつもりだ。

先手必勝、やられる前にやれ！

「うおおおおお……！」

剣を抜いたクレミーが雄叫びを上げながら突進する。すると少女はびっくりしたように獲物を取り落とし、あたふたと左右を見回すと、泡を食つて逃げ出した。

拍子抜けして立ち止ったクレミーを置いて、少女は田にも留まらず速さで来た道を引き返して行く。と思つたら突然かくんと横に折れ、近くの適当な樹木の後ろに身を隠した。そのままそつと顔だけ覗かせてクレミーを窺う。

二人の間に沈黙が流れる。

「あの……」

気まずさに耐え切れなくなつたクレミーが先に声を漏らした。神経質になつてゐる少女はその咳きにすら敏感に反応し、びくんと小さく跳ね上ると、一本後ろの木へと移つた。そしてまた顔を覗かせる。

すっかり戦意を削がれたクレミーは剣を仕舞い、剣帯から鞘を外して地面に置いた。加えて両手を上げて害意がないことを示すと、不器用に少女に向かつて笑いかけた。

少女はそこで初めて安心したように息をつき、落とした獲物を拾いに戻つてきた。至近距離で見る彼女の思つた以上に整つた顔立ちや、エルフ特有の色鮮やかな翠色の長髪にクレミーはどうもさせられた。

「あの、どうしてこの森の中に……？」

少女は若干の怯えを含む細々とした声でクレミーに恐る恐る尋ねた。

その質問に答えようと口を開いた時、クレミーはある問題に直面した。田の前の少女に対してもう一つ接するべきかといつ問題だ。皇城内では、身内相手にも敬語で話していたが、それに恩苦しさを感じていなかつたかと聞かれれば、答えはおそらく『ノー』になる。ところが、既に皇子という身分を捨てたといつのならば、そのような丁寧な口調からも離れるべきではないだろうか。

それに何より、もし口調で皇子だとバレたら大変だ。

「ええと、」

クレミーが語頭を漏らすと、少女は獲物を担ぎ上げるために屈んだ姿勢のままクレミーを見上げた。上目遣いのその瞳にはまだわず

かに恐怖が滲んでいる。

「森に入る前の分かれ道に立て札があつたんだけど、そこにこうち
の道の方が安全って書いてあつたから、かな」

クレミーが慣れない口調に苦労しながら説明すると、少女はぽか
んと首を傾げた。

「安全……ですか？ たしか、あそこの立て札には「こちらの森には
立ち入らないように書いてあつたはずなのですが。それに、森の入
口にも同じようなことが書かれた看板があつたと思いますし」

「ええ、そんな……」

クレミーは記憶を辿った。あの幼児が書いたような稚拙な字は忘
れようにも忘れられない。今思えば、そのいかにも怪しい立て札を
もつと疑うべきだったのかもしれない。

「あつ」

「どうかしましたか？」

「もしかしてさつきの子供達が……」

「いじもつ？」

かくんと首を傾げる少女に、先程の事件について話す。いきなり
襲われたこと、犯人はエルフ族の少年達だったこと、荷物を盗られ
たことなどをだ。

「ああ……あの子達はまたなんごうことを……」

少女は頭が痛いといつたふうに額に手を当て、それからはつと氣
付いたようにクレミーの方を見ると、急いで頭を下げる。

「「めんなさい」！ 村の子供達が大変なことを！ それもそうです
よね、警戒されても仕方ないです。……本当に「めんなさい」
いや、謝るのは僕の方だよ。どんな理由があるようと、君に剣を向
けてしまった。許してほしい」

お互に非を認め合つて、ひとまずその話は終わりにした。

「そうだ、村つて？」

「「」の森の奥地にあるエルフの村です。そこではわたしを含め少數
のエルフの民が暮らしております

ところには、やつきの少年達は村に帰つたところだとだらうか。

クレミーは倒木の向こうへ目を向ける。

「あ、申し遅れました。わたしはシャロンという者です。知っていますか？ エルフは一族全体が一つの家族とされているので姓がないのですよ。……えつと、お名前を伺つても？」

「あ、うん。僕はクレミー・ド」

ドイルと名乗ろうとして言い留まつた。確かに皇家は捨てたが、姓をどうするかまでは考へが及んでいた。とはいえてこでドイルを名乗るのも面倒なことになりそつなので、急遽、母方の旧姓を拝借することにした。

「ミルフォード。よろしくね、シャロン」

クレミーはごまかしのつもりでぎこちなく笑つた。

シャロンは特に疑う素振りもなく、「クレミーさんですか。そういえば、帝国の皇子様もそんな名前だった気がします」と先程までの怯えが嘘のように笑顔で手を差し出した。クレミーは彼女の何気ない一言に内心ひやひやさせられながらも、表向きには快く握手に応じた。これから名乗るたびにこのような複雑な思いが影を落とすのだろうかと思うと、いささか気が重くなつた。

「ところで、人間がその村に行くのはまずいのかな。えつと、ほら、盗られた荷物のこともあるし」

「いえ、人間を好んでいないのは一部のエルフのみなのです。本當は、種族の違いとか寿命の違いとか関係なしに一緒に暮らせたらいいのですけれど……。って、そうじゃなくて！ 私の知り合いでと言えば、村の人達もわかつてくれると思います、たぶん、おそらく、もしかしたら……」

尻すぼみになるシャロンの言葉。だがそれでもクレミーを安心させるには十分だつた。このまま荷物を見限つて来た道を引き返すことになるだろうと半ば諦観していたため、その安堵感もひとしおだ。もうすぐ日が落ちる。

夜行性の魔物は凶暴といわれる。できれば暗くなる前に村に着き

たいものだ。

「大丈夫ですっ。わたしが案内しますから」

シャロンはぐっと胸の前でガツッポーズを取ると、獲物を抱えて歩き出した。森の入口に向かつて。

「そつち逆だけど

「……はっ！？」

シャロンは慌ててくるりとヒターンをすると、羞恥に頬を赤らめて逃げるように倒木を飛び越えた。獲物を抱ぎながらもその動作は軽快だ。

「本当に大丈夫かな」

すんすんと先を行くシャロンの背中を眺めながら、クレミーは先行きが心配でならなかつた。

夕暮れのエルフの森には鳥からすの感傷的な鳴き声がこだまし、西からの落陽が道なき道を歩く一人の身体を煌々と照らしていた。

*

「すうい……森の中にこんな広い空間があつたなんて……」

円状に森を切り拓いてつくつた広大な芝生の広場には布張りの家屋が散在している。中心に置かれた銅像を囲むようにして同心円状に家々が建ち並び、布越しに漏れる家の明かりや、ゆらゆらと立ち昇る調理の湯気などからは村の営みが盛んに窺えた。帝都とはまた違つたあたたかさがそこには感じ取れた。

それがシャロンの暮らすエルフの村『ルンカ』の風景だ。

ルンカとは太古の昔にこの豊かな森を発見し、仲間と共に村を建てたエルフ族の先祖の名前で、現存するエルフの民は総じてルンカ

の血を引いていると伝えられている。中心にある銅像もそのルンカを模して彫られたものだ。

一人がエルフの村に着いたのは日没をとっくに過ぎて、月がちょうど真上にのぼった頃だった。

「なんだか、思つたより時間が掛かりましたね」

「……そうだね」

シャロンの悪意のない感想に、クレミーは呆れを通り越して力無く答えた。

本来ならば、ここまで遅くなるはずはなかつたのだ。倒木のあつた地点、すなわちクレミーが危うく殺されかけたあの因縁の場所にいた時点で既に村は目前だつた。

ところが、道中でシャロンが「近道があるんです」と得意満面に林の中を進んでいったせいで、もちろん方向音痴の彼女のことだから村に着くまでにかなりの糺余曲折を経たのは言うまでもないが、それに加えて彼女が狩つたモリギツネの同胞達に追い回されたり、途中で「愛用の弓」を落としてしまいました!」と来た道を随分と遡つたり、終いには完全に迷子と化したシャロンが泣きそうな顔でクレミーに縋つてきましたので、結局こんな時間になつてしまつた。今まで一人の時はどうやって村に帰つていたのだろうか。クレミーは隣にいる森生まれ森育ちの超天然娘の横顔を見やり、それから諦めたように嘆息した。

当の本人はここに行き着くまでの苦労はもう水に流してしまったようになんと伸びをすると、クレミーを振り返つて無邪気に笑つた。「わたし、お腹ペコペコです。帰つて早くご飯にしましょう!」

「あ、シャロン……」

言つが早いが、シャロンは嬉々として一つの家に向かつて駆けて行く。同心円の最も外側の家だ。クレミーは攫われた荷物のことがいささか気がかりではあつたが、シャロンのあの無垢な笑顔を見ていたら、些細な問題だと思つた。

家中から顔だけ出して「クレミーさん早く早く!」と手招きす

るシャロンに急かされてクレミーは布製の玄関をくぐつた。丸太を組んだ足場に獸皮を敷いて布地を被せただけの簡素な造りの家の天井から吊るされたランタンの橙色の光で満たされており、どこなく幻想的だった。

「あの、クレミーさん。本当はこの村にも公衆浴場があるのですけれど、思いのほか帰りが遅くなってしまって、その……」

「時間切れ？」

「そうなのです。」めんなさい……」

しゅんとするシャロンに、クレミーは手を振つて答える。

「いいよいよ。別に一日お風呂に入らなかつたところで死ぬわけじゃないから。むしろ、シャロンは平氣なの？」

「へっ？」

「だつて、女の子なのに」

察しが悪いシャロンにクレミーが付け加えると、彼女はそんなことかと合点がいった。

「いえいえ。森で生活している以上、ここにつけとこには慣れますから」

シャロンは得意げに胸を張つた。

それから二人は申し訳程度にタオルで身体を拭いた。もちろん別々の場所で。

「この灯りはどうやつて点いているの？」

身体を拭き終えてお互に顔を合わせると、クレミーは氣になつていた疑問を投げかけた。

ランプに明かりを灯したければ蠅燭かオイルやガスといった燃料が必須である。ところが目の前のランタンにはそれらしいものはなく、ただのガラス球にしか見えなかつた。

森の中なので電動はありえないだろうし、何よつこの部屋には放電石も電気配線も見当たらない。

シャロンは少し意外そうな顔でクレミーを見つめ、「魔術ですよ」と悪戯っぽく笑うと、ランタンに人差し指を向けた。すると、まる

でスイッチのオン・オフを切り替えるようにランタンの灯が明滅し始めた。

「すごい！」

「火の魔術の一種です。……こんなこともできますよ」
クレミーに褒められて上機嫌なシャロンは今度はランプに向かって手を開いた。そしてさっきよりも強く力を集中させたところ、ガラスの中の灯が突然ぼうっと燃え上がった。盛んに燃焼する炎は容器を焦がさんばかりにその勢いを増していく、やがて部屋の中が真昼のように明るくなつた。

「ま、眩しい……！」

「あはははっ」

シャロンがかざしていた手を下ろすと、ランタンは元の火力を取り戻した。しかし灯が消えていないということはシャロンが魔術を使い続けている証拠だ。単純な術なら無意識的にも唱えられるということだろうか。

「それにしても、驚きました。クレミーさんは魔術を存じないのですか？」

「知っているには知っているんだけど……」

アレンという偉大な魔術師の魔術を間近で見てきたのだから、とは言わない。

「僕は使えないから」

セントラルバニアには魔術という文化があまり浸透していない。他国には昔から、中央といえば剣、剣といえば中央といったイメージで通つていてるらしく、はるばる帝都にやって来る若き芽の多くは騎士団志望や武者修行目的であることが多かつた。そして、その分魔術の発展は遅れることになる。結果、魔術を専門に教える学校もなければ、独自の研究機関もないといった非魔術志向の国が生まれてしまった。一応、知識や技術は書物という形で他国からの輸入しているものの、使い手の欠乏も相まって、実用レベルに達していないうといのが現実だ。

「えつ、やうなのですか？　わたしはてつきり使えるのだと思つてました」

だつて、とシャロンはクレミーの胸の辺りを指差した。クレミーはまさか自分で燃やされてしまうのではないかと思つてどきりと心臓が跳ね上がつた。

「こんなにも魔力に溢れている人、わたし見たことないですよ」「えつ？」

シャロンはちょっと首を傾げると、それから思いついたようにぽんと手を打つた。

「そうだ！　わたしが魔術を教えてあげればいいんだ」

「え、本当に？」

「はい！　……といつても、わたしも簡単なものしか使えないのですけれど」

シャロンは恥ずかしそうにペラリと舌を出した。

「十分だよ。実は昔からけっこつ憧れてたんだ」

「それは何よりです。では、何から教えましょ　」

その時、シャロンの腹の虫が盛大な音を立てた。そこで初めて二人は夕食を食べていなかったことに気が付いた。

「わ、恥ずかしい……」

「まずはご飯だね。魔術は明日にでもお願ひしようかな」「はい……」

クレミーは顔を真っ赤にしたシャロンとともに、少し遅めの夕食の準備に取り掛かった。献立は本日シャロンが獲ってきたモリギツネの香り焼きと、村で採れる山菜のスープだ。

食事を終えた頃にはすっかり夜も更けてしまつた。クレミーは食卓の椅子で早々に舟を漕いでいるシャロンを寝床に連れて行き、玄関先にあつた水瓶で食器を洗つた。最後にクレミーには消せないランタンの灯をシャロンに消すように囁きかけると、いくつか寝言を並べたのち、ふっと灯が消えた。

クレミーは思い出したように軽鎧を先程のタオルで拭いてから、

適当にその辺の床で横になつた。

「やっぱり着替えは持つてくるべきだつたな
かさばるので諦めたが、やはり服を替えないといどいか心地が悪い。
城の恵まれた生活が身体に染み込んでいるクレニーは実を言えば身
体を流さないことにかなりの抵抗があつたのだが、シャロンの前
ではそんなことは口に出来るはずもなかつた。
「僕はもう、皇子じゃないんだから……」
疲労から眠気はすぐにやつて來た。
ろくに帝都を出たこともない皇子の放浪一日目は、これにて幕を
閉じた。

act - 04 ルンカの秘宝

人々の喧騒で目が覚めた。何やら近所で揉めているような声がある。

クレミーは徐々に覚醒する意識の中で、真っ先にそれを認識した。次に抱いたのは違和感。美しい小鳥のさえずりやひんやりと透き通った大気、背中に当たる柔らかな獸皮の床、色褪せた布張りの天井。それらは皇城で味わう『いつもの朝』の感覚とは打って変わつて、新鮮な目覚めを提供してくれる。

「ああ」

そこでクレミーは自分がエルフの村を訪れていたことを思い出した。前日の、旅の初日にしては濃厚すぎる出来事の数々が蘇る。

「そうだ、シャロンは……」

狭い家中を見回すが、その姿はどこにもない。

もう狩りに出かけてしまったのだろうか。昨晩、夕食の支度を手伝った時にはまだモリギツネの肉は残っていたように見えたし、その他の野菜類も多く貯蔵されている。少なくとも、今朝の朝食に困ることがない程度には蓄えはある。

それにシャロンの性格上、黙つて出て行くとも考えにくい。彼女とは会つて間もないが、クレミーにもそれくらいは判つた。ならば、どこに。

「クレミーさんは悪い人じやないですっ！」

矢庭に外から聞こえたきた怒声に、クレミーはつい戸口を振り返つた。

それは確かにシャロンの声だった。あの温厚な彼女がこのように取り乱すなど、きっとただ事ではない。そこにクレミーの名前が挙がっているのも気になつた。

『いえ、人間を好んでいないのは一部のエルフのみなのです。本当は、種族の違いとか寿命の違いとか関係なしに一緒に暮らせたらいい

いのですけれど……』

昨日のシャロンの言葉が脳裏を過った。

クレミーが急いで外に出ようと腰を上げたところで、村人らしき男の声がする。

「悪いかどうかを決めるのは君じゃない。俺達だ。それに、君だって七年前のあの事件を忘れたわけではあるまい。そこをどけ、シャロン」

「ですが……！」

なおも食い下がろうとするシャロンに堪えきれなくなつて、クレミーは布の戸口から飛び出した。

「出てきたぞ！ 人間だ！」

クレミーの姿を認めた村人達がどよめきの声を上げる。

朝日にくらむ日をこらして周囲を見回すと、芝生の地面にはざつと一十人ほどのエルフの民が居合させていた。遠巻きに眺めている者も合わせれば五十は下らない。そして衆人に立ちはだかるようにしてシャロンが向かい合つている。

なるほど、昨夜のうちに僕を見かけた誰かが密告したか。

諸人の中には『や剣を手にする者まで見受けられ、クレミーは状況の穏やかでないのを悟つた。

「あ、クレミーさん。おはようございます。昨日はよく眠れましたか？ ごめんなさい、なんだか起こしてしまったみたいで」

クレミーはがくりと脱力した。

この期に及んでそのようなことを口走るシャロンはきっと相当の善人で、とんでもなく変わり者だ。それなりに緊張していたクレミーの身体は彼女の見当違いの一言で一気に力が抜けてしまった。

が、自分に向けられた武器の数々を目にしたクレミーはすぐさま氣を引き締め直した。弁明の言葉はいくらでも浮かんだが、ひとまづは、鎧も剣も外した丸腰の身で昨日森の中でシャロンにしたのと同じように両手を上げた。口であれこれ言つよりも視覚に訴えた方が効果的であることは実証済みだ。

「貴様何のつもりだ？ 人間」

居並ぶ村人の一人が眉をひそめた。家の中で聞いたのと同じ野太い声。どうやらこの男が村人の代表格であるようだ。

「僕はあなた方に危害を加えるつもりはありません。それをまず分かつていただきたいのです」

「ふん、青一才が小瀆な真似を。……いいだろう、武器を下ろせ」男の合図で村人達は渋々構えを解いた。クレミーも手を下ろして真っ直ぐに男を見据える。

「僕はクレミー・ミルフォード。帝都出身の旅人です。昨日、サウサーーに向かう道の途中で見た立て札にしたがつてこの森にやつてきました」

「立て札だと？ もしや分かれ道のか？」

「その通りです。地図を持ち合わせていなかつた僕はそれを頼るほかなかつたのです。立て札には右の道には魔物があり、代わりに左の道は安全だと書かれていました。……まるで子供が書いたような拙い字体で」

最後にクレミーが付け加えると、男の足下に隠れていた少年がわめき立てる。

「嘘だ！ こいつ嘘ついてる！ おれはそんなことしてないぞ！」

「どうしたパウ。誰もお前がやつたなどとは言つていないと」

パウと呼ばれた少年ははつとして押し黙つた。

クレミーはその顔に見覚えがあつた。いや、忘れもしない。昨日、クレミーの荷物を奪い去つた三人の少年のリーダー格だ。やはりこの村に帰つて来ていたらしい。となると、目の前の男はその父親だらうか。

「とにかく事情は飲み込めた。だが、クレミーとやら。まだ貴様を信用した訳ではないぞ。七年前の事件だつて、我々が人間を信じきつたばかりに招いてしまつたようなものだからな」

七年前の事件。先程の男とシャロンとの会話にも出てきた単語だ。クレミーは何か自分の知らない、人間とエルフ族との間に根付く

確執のようなものをそこに感じ取つた。

頑として受け容れようとしないその男の目は現在進行形でクレミーの全身を警め回すように観察している。人間というだけでこれ程までに厳重に警戒する原因がその事件にはあるのだろう。

「七年前に一体何があつたのですか？」

クレミーの当然の質問に、しかし男は難色を示した。強く握られた拳が小刻みに震えている。言葉にするのにも厭惡を伴つらしい。

「あの、クレミーさん。寒は、」

「いい、シャロン。俺から話す

「ペドロさん……」

代わりに説明しようとしたシャロンをペドロと呼ばれた代表格の男は片手で制した。それから頭をもたげる忌まわしい過去を振り払うようにして首を振ると、パウや村人達を各自の家に帰した。

「見せたいものがある。付いて来い」

村の奥地に向けて歩き出すその足取りは重く、鈍い。振り返りざまに一瞬だけ映ったペドロの瞳に悲痛や悔恨といった負の感情がまざまざと滲んでいたのをクレミーは見逃さなかつた。

「行きましょう、クレミーさん」

「ああ」

すぐに一人もペドロの後を追つて芝生の地面に足を踏み出した。

*

クレミーは眼前の光景に、ぐくりと生睡を飲み込んだ。出すべき言葉も見つからない。胸の辺りがざわつき、息が詰まつた。

村から数分歩いた場所に、その凄惨な景色は広がつていた。

それは焼け野原だつた。

見覚えのある同心円状の家屋の配置は七年前まで確かにそこにルンカの村が存在していたことを証明していた。ただし、今は焼け焦げた柱と布の残骸が無残に横たわるだけだ。かつて立派に建立していたであろうルンカの像は腰から砕け、半身がその台座の辺りに転がっている。それが意図的な破壊であるのは疑いようもない。

「これを、人間が……？」

クレミーが掠れる声で搾り出す。

「そうだ」

端的な解答はより深くクレミーの胸に突き刺さつた。

正直に言えば、信じられなかつた。無論、万人が善良でないことは心得ているつもりだが、それでも、目の前に紛れもない事実として存在する爪跡を過去の人間の所業として受け容れるのには抵抗があつた。

「次はこつちだ」

ペドロに連れられ、また少し森を進む。

今度は慰靈碑だつた。村と同じく森を切り開いてつくつた空間に、見上げるほどに巨大な石碑が静かに佇んでいる。苔一つない、清潔に保たれた石碑の状態には村人の亡き尊い『家族』に対する厚い情念が表れていた。その表面には当時無念にも散つていつた故人の名前が連ねられている。

「偉大なるルンカの遺志を継ぎ、故郷を護りし誇り高きエルフの民、ここに眠る……」

クレミーが石碑の最後に刻まれた文句を読み上げると、隣に立つシャロンがぐすんと鼻をすする音がした。何度もここを訪れたであろう彼女にとつてもこの悲しみは決して拭い去れない心の傷となつているのだ。

「人間はな、」

ペドロは感情の読めない声色で切り出した。

「おそらくエルフを疎んでいたんだ。いや、『疎んでいる』のかも

しない。ともかく自分達よりも長い寿命を持つエルフのことが不気味でしかたがなかつた。だから村を焼き払つた

「そんな。それだけの理由で」

村一つを滅ぼすなんてことがあり得るのだろうか。

クレミーはやはりどこか腑に落ちなかつた。確かに人間の中には性根の腐つた下衆のような連中もいるにはいる。だが、七年前の事件は本当に単純な悪意による犯行だつたのだろうか。

何がが引っ掛かる。

「まあ他にも、この森のどこかに眠るといわれるルンカの秘宝を狙つていただなんて諸説もあるがな。まったく、あいつらはそんなあたりもしない逸話の為に死んでいったつてのか。はつ、ふざけやがつて」

「冗談じみた口調とは裏腹に、ペドロはそつと目頭を押された。初対面の厳つい印象との落差がその悲壮感を一層引き立たせる。

思った以上に確執は深かつたようだ。

しかしながら、クレミーはペドロの最後の話の中に一つ思い当たる節があつた。

あれはいつぞやのことだつたか。とはいへ、幼心地に残つている記憶といえば祖父デミトリアスの荒唐無稽な語り草くらいなものなのだ。

そう、ルンカだ。ルンカにまつわる秘話があつたはずだ。それだけでなく、現在のエルフと人間との関係にもつながる重要な挿話が。頭の片隅で疼くわずかな記憶に手を伸ばし、やおら紐解く。

あれは、確か。

*

病床に臥したデミトリアスを見舞うため、少年クレミーは祖父の病室を訪ねていた。彼の来訪に気が付いた医師や侍女達はにこやかに病室を去つて行き、やがて一人きりになつた。

お気に入りの孫の姿を認めると、デミトリアスは皺をいつぱいに寄せて破顔した。クレミーはその柔らかい笑顔が好きで、こうして毎日見舞いに来ていたのだつた。

「ルンカという名を知つてゐるか、クレミーよ」

「いいえ。存じ上げません」

「太古に生きた偉大なるエルフの祖先の名だ。エルフのこととは知つてゐるか」

「はい、書物で見たことがあります。耳がこんなに長くて……」

クレミーは嬉しそうに挿絵の真似をした。「そうかそうか」と満足げに彼の頭を撫でながら、デミトリアスは話を続ける。

「そのルンカはな。昔、盗賊だったんだ。人様の物を盗む、悪いやつだ。奴は仲間のエルフとともにたくさん街や村を襲い、金銀財宝をかっぽらつた。やがて各地で悪名が広まり、身動きが取れなくなつた奴はとある森に逃げ込んだ。それから奴は森の奥地にエルフの村を建て、そこに腰を据えた。……おつと、付いて來ているか、クレミー？」

デミトリアスは思い出したようにクレミーの顔を覗き込んだ。

「はい。大丈夫です」

本当は、わからない言葉がたくさんあつたけれど。

「そうか。賢しい子だな、クレミーは。……そこで盗賊から手を引いたルンカは今まで人々から盗んできた宝をどうするべきか悩んだ。持ち主に返すのも忍びない。所持しているのにも危険が伴う。悩んだ末に、奴は全ての盗品を森のどこかに隠すことに決めた」

身振り手振りをつけて説明すると、クレミーは身体を乗り出すようにして聞き入つた。

「そのお宝は今、どこにあるのですか？」

「へつ？」

興味津々といった様子のクレミー、デミトリアスは顎に手を当てて考え込んだ。

「うーむ、どうだろ？……。ずるがしこい奴のことだから、案外、地面の下にでも埋めていたりしてな。なんてつたつて、ルンカはこのセントラルバニアの包囲網から歴史上唯一逃れられた犯罪者だからな。何を考えたつておかしくはない」

「ずっと昔のお話なのに、どうしてお祖父様はそのようなことを知つているのですか？」

デミトリアスは顔を引きつらせると、じまかすように窓の外を見た。

「は、はは。実はこれは伝記にあった話なんだ。だから儂が直接見た訳ではないし、確証はないんだが、」

「なーんだ。じゃあ嘘かあ」

あからさまに気を落とすいじらしい孫の姿に堪えられず、デミトリアスは胸を張つて答える。

「嘘かどうかはまだ決まっていなあい！ 儂はいつかその森に出向いて、財宝を独り占めしてやるつもりだ！ その時はクレミー！」

「は、はいっ！」

「……お前も付いて来てくれるか？」

「えつ。はい、行きます！ 絶対に付いて行きます！」

クレミーがぱあっと顔を輝かせたのを見て、孫に目がない祖父はくしゃりと相好を崩した。

それから数ヶ月後、デミトリアスは静かに息を引き取つた。森に隠されしルンカの秘宝を手に入れるという野望は、ついに果たせずに。

クレミーが話しつづけると、シャロンは息を飲んだ。ペドロも驚きを隠せないでいる。

「初耳です。まさか、あのルンカが盗賊だつたなんて……」

「いや、突つ込むべきはそいじやないだろ?」「う

「えつ? どうこつ」とぞしょつか、ペドロさん

小首を傾げるシャロンに、ペドロは呆れ果てた。

「……はあ。じゃあ聞くが、クレミーさんよ。お前さんはいつからセントラルバニア帝国の皇子様になつたんだ?」「あつ」

クレミーとシャロンの声が重なつた。

しきじつた。エルフと人間との関係を追究するあまり、つい口を滑らせてしまつた。せつかくシャロンにも隠していた素性をよもや自分自身の口から露見することにならうとは。

クレミーは開いた口が塞がらなかつた。

ペドロは放心状態の一人を一警して、小さく溜め息をついた。

「別に驚くこともない。黒髪黒眼なんて世の中そういうもんじやないし、少なくとも俺は帝国の第一皇子様以外にそんな外見をしているつて奴を知らない。だから、初めてお前さんを見たときからもしやとは思つていたんだが、まさか本当だつたとはな。ふん、こんな隔絶された森の中だつたら帝国の情報なんか伝わつていなかうとか高を括つていたんだろ?」「

ペドロの鋭い一言一言が凍りついたクレミーの心を容赦なく抉つていぐ。

「で、でも。クレミーさんはクレミー・ミルフォードさんですよ。全然、ドイルじゃないです」

「おそれらく偽名だな。大方、母親の旧姓つてといふか

全部バレてるよ。

「そ、そうなのですか？ クレミーさん」

驚くシャロンにクレミーは力なく頷いた。

できれば再び帝都に帰るその時までは何人にも身分を明かすつもりはなかつたのだが、放浪一日にしてその日論見は完膚なきまでに破られてしまった。しかし、知られてしまつたものを今更なしにしてくださいとは言えない。

「あの、できればこのことは……」

「分かつてゐるよ。村の奴らには黙つておけばいいんだらう。特別隠すほどのことでもないと思うがな」

そこでクレミーの正体についての勘ぐりのあれこれは一旦打ち切られた。

自然に話はルンカの来歴へと遡る。

「……やっぱり、ルンカが盗賊だつたなんて信じられないです」

突如告げられた意想外の事実に、シャロンは少なからずショックを受けていた。尊敬する人物が実は街から街へと物品を強奪して回る盗賊だつたといわれればそれも無理はない。

「実はね、シャロン。御祖父様の死後、僕は生前に御祖父様が愛読していたという伝記を探してみたんだ。一度は城を総動員して捜索したりもしたんだけれど、とうとう見つけることはできなかつた。だから、はつきり言って信憑性はかなり低いよ。あの突飛な御祖父様のことだから、ルンカのエピソード 자체が全部嘘だつたなんてのも十分にあり得る」

「そうなのですか……。残念ですね」

「その時、僕は十歳くらいだから、きっとお祖父様にだまされたのだと思う」

シャロンはしょぼんと肩を落として俯いた。もし財宝の存在が眞実で、それを掘り出すことができれば、そしてその財宝を人間側に返還することができれば、きっとルンカの罪は浄化される。そうすれば、人間とエルフとの間の確執も取り去ができるかも知れない。少なくともそのきっかけにはなるはずだ。そこまで考えたの

だが、唯一の証拠である伝記の在り処が不明では、村ぐるみで発掘作業を執り行うための理由としては不十分だ。やはり物的証拠がなければ話にならない。

「そういうことなので、ペドロさん。やつぱり地下には財宝なんて

」

「ある」

遠慮がちに告げるクレマーを、ペドロは片手で制した。

「……はい？」

「詳細は後だ。まずは長老様の所へ行くぞ」

「ちょ、長老?」

話の展開についていけないクレマーを置いて、ペドロは脇田も振らず村へと駆け出した。取り残されたクレマーは縋るようにシャロンの方を見やつたが、彼女はもつと頭の上に疑問符を浮かべていた。こりゃダメだ。

「シャロン。事情は飲み込めないけど僕達も後を追おう」「ええっと……ルンカが盗賊で……伝記がなくて……でも財宝はあつて……ええええっ！？」「どうして！？

「シャロン！ 混乱するなら後にしても、僕一人じや村に帰れないから今は案内をお願い！」

「は、はい！ 行きましょう！」

ぐるぐると田を回していくシャロンはやつと我を取り戻して走り出した。

「つて、そつちは逆！？」

「あれれ、村つてどっちでしたつけ！？

これまた前途多難の予感だった。

act - 05 不審な影

とある森の手前に大型の電動車が停まっている。

唸りつぱなしの機関は腹の底に響くような重低音を辺りに撒き散らし、小鳥を退け草花を揺らして穏やかな朝の一時を台なしにする。この場所に駐在してから丸一日ほど経っているが、昼夜関係なくこの調子だつた。しかし、おいそれとエンジンを切るわけにもいかない。近隣町村の自警団に見つかった時のことなどを考へると、いつでも逃げる準備を整えておく必要があるためだ。

「俺様は悪人だ。それもかなりの悪人だ。その部下であるおめヒラもかなりの悪人だ。だからその辺の小物どものようにチンケな窃盜や無意味な殺人はしねエ。なんてつたつて、俺様達『赤目盗賊団』が目指すのは世界一の大悪党だからなア！ そうだろプチ！」

広い車内、額にバンダナをした長髪の若者は邪惡な笑いを含みながら隣に座る男に赤い瞳を向けた。プチと呼ばれた神経質そうな男は忙しく眼鏡の位置を気にしながら、仮頂面で頷いた。

「おっしゃる通りでござります、若」

その返事に赤目の男は満足そうに、ヒヤハハ、と笑つた。

「……ですが、できれば私のことはモンティとお呼びいただきたく

」

「おっとプチ、ちょっとそここの布取つてくれるか

「……了解致しました」

と、不服そうにしながらも若者に従う男の名はプチ・モンティ。盜賊団の参謀を務める知将であると同時に、団長の世話係も兼任している。そして先程から無心に愛用のファルシオンを研いでいる眼光の鋭い若者が団長のロロ・レッドアイである。

彼ら赤目盜賊団は昨日の昼頃から、ある分かれ道の立て札を目印に駐留していた。

「お頭！ 斧候部隊が戻つてきやした！」

子分の一人が開いた車の窓に顔だけ突っ込んで言った。

「部隊つておめエ、行つたの一人だけだろオがよ。で、どつだつた
「はい！ やはり情報屋の言つていたことは正しかつたようです。
昨日森の中に入つて行つた男はセントラルバニアの皇子で間違いあ
りやせんでした！」

そりや吉報だア、と口口はにやりと口を緩めた。さつそく動き始めようと腰を上げたところで、

「あア？」

例の看板が目に留まつた。

『みぎ……まもの。ひだり……あんぜん』

絵と文字の中間のような粗雑な字だが、書いてある内容はでたら
めだ。一体誰がこんなくだらないことをするのか。大悪人としては
見過ごせない。

「さつきから気になつてたんだが……あれア何だ？」

団員はくるりと分かれ道を振り返ると、

「いえ、あつしらにもわかりやせん。子供のいたずらか何かでしょ
う」

さつぱり、といつたふうに両手を上げた。

「じじ」と眼鏡のレンズを拭いていたプチも看板に興味を示し、
窓に鼻を擦り付けるようにしてそれを見てみた。

「ははあ、なんと汚い字でございましょう。……む？ この森……
まさか」

あん？ と口口はその言葉に引っかかりを覚えたが、まあいいか
と立て札から視線を外した。天井に頭をぶつけないように猫背で運
転席に向かいつつ、そこでふと思いつつに咳く。

「そういうやア、親父が昔、この森にいるエルフは財宝を隠し持つて
るとかなんとか言つてた氣がすんなア」

「……エルフ……財宝……」

プチは急に頭が痛くなつたようにこめかみの辺りを押さえた。

「どうしたよ？」

「嫌な出来事を思い出しました……」

冷静が取り柄のプチが苦悶に顔を歪めている。予想外の反応に、口々は戸惑つたように後部座席を振り返った。

「ンだよ。ここで何かあつたってエのか？」

「ええ。過去、この森で起きた事件でござります……」

滴る冷や汗を拭いながら、プチは口々に語つて聞かせた。

それは七年前、プチがまだ赤目盗賊レッド・ギャング団の参謀ではなく、別の盗賊

団に所属していた時代の話だ。

*

逃げ惑う人々。鳴り止まない悲鳴。人体の燃える嫌な臭い。

なぜ、こんなことになつている？ プチは頭を搔きむしめた。

ルンカ村が火の海と化している。なぜか、だと？ そんなのははつきりしている、団長の仕業だ。

そして今、プチの目の前では崩れた家の下敷きになつた母と娘が必死にこちらに助けを求めている。暗闇を払う真つ赤な火炎は家から家へと燃え移り、徐々に森を消していく。彼女達がいる所に火の手が回るのも時間の問題だつた。

だが、プチには彼女達を助けることができない。

「モンティ！ 何してる！」

さつさとずらかるぞ、と後ろから仲間が急き立ててくる。

「くつ……！」

わかっている、一刻も早く仲間のところまで戻らなければ。ここにも直に炎が回つてくるだろう。プチだって全くもつて安全なわけではないのだ。宝は手に入らなかつたが、たまにはそういうことだ

つてあるだろ？ 団長だって「無いもんは仕方ないな」と笑っていたはずだ。

だから早く戻って、寝心地の悪いシートで夜を明かそう。そう思つているのに、体が動かない。目の前の光景から目が離せない。

「おい！ 早くしろ！」

「……ああ」

仲間が見ている手前、あの母子おやこを引っ張り出すことは許されない。だからといって罪なき村人を前にして見て見ぬふりで逃げ出すほど非情にもなれず、ただ眺めることしかできなかつた。

立ち尽くすプチの横を何人もの村人が走り去つていく。彼らは皆、炎の魔の手から自身を守るのに必死で、他人には目もくれていない様子だ。

それも当然か。プチは妙に納得したように眼鏡を押し上げた。

「何故ですか……団長……」

計画ではここまでするつもりはなかつた。今回の一件に関しては、全ての責任は団長の独断にある。

だから私は悪くない。何も悪くないのに、

「何故、あなた達はそんな……まるで悪魔か何かを見るような冷たく恐ろしい目で、私を見るのだ！」

母子おやこに向かつて吼えるが、死の危険に晒された彼女達には聞こえていなかつた。

動けない彼女達に炎が迫る。もはや悩んでいる時間はない。この先、盜賊稼業を続けていく以上はここで情けをかけるわけにはいかないのだ。

『心など捨ててしまえ、重荷になるだけだ』

団長も言つていた。

だが。

プチはもう一度眼鏡を直すと、すっと彼女達に背を向けた。そして走り去ろうとする村人の服の裾を大急ぎで引っつかむと、深々と頭を下げる。

「逃げ遅れた母子がいるんだ！ まだ助かる！ 手伝ってくれない
か……頼む」

*

「あれから間もなく、私はあの盗賊団を脱退いたしました。しかし、一度悪事に手を染めた私が真っ当な職に就けるはずもなく、有り金が底をついて、餓死寸前で倒れていたところを先代に拾われたというわけでござります」

口口は考え込む。

七年前だと、ちょうど口口がまだ盗賊団に入つたばかりの頃の話だろう。先代団長の父とブチの繫がりはそこからということになる。

「にしても、財宝かア……。そいつア、どんなモンだ？」

「私の記憶に間違いがなければ、確かに大盗賊ルンカが己の死を

目前にして、自身の魂を封じ込めたと云われる、呪いの指輪」

「そりや大物だなア！ んじゃ、ついでにそれも頂いてつかア！

おつと、村人を殺したりしちゃダメだゼエ？ 度も言つようにな
悪党は無意味な殺しはしねエんだ」

ヒヤハハハ！ と高らかに笑う口口を見て、ブチは溜め息をついた。

若、あなたは盗賊には向いていませんよ、と。

*

ペドロが長老と呼んだのはルンカの村長のことだった。本来は村の長おさをそのように称する習慣はなかつたのだが、現長おさは大抵の場合一世代でその任期を終えるべきその任をなんとペドロの一つ上の世代から三世代にまたがつて務めており、加えて、老熟による威厳や豊富な人生経験に基づく判断力は並々でないため、村人達は敬意を込めて『長老』とそう呼ぶようになった。

といふのは表の話で、実のところは、彼の年齢がエルフ最長記録を今なお更新中であることに由来する。

村へ帰る途中に、クレミーは大体そんなような内容をシャロンから聞いた。というよりも、彼女が勝手に喋り出したといったほうが多い。よほどその長老のことを敬愛しているのか、彼女の語りはどこか誇らしげだつたように感じた。

たつぱりと回り道をして、二人はようやく村の外周まで辿り着いた。

「はあ、はあ。シャロン、はやいよ……」

「そうですか？ わたしはいつも通りですよ」

足場の優れない森林を疾走したためにクレミーは息も絶え絶えだが、なぜかシャロンの呼吸は微塵も乱れていなかつた。同じ距離を走つたのかと思わず疑いたくなるほどに。

木立を蹴り、根や草をかわし、枝から枝へと飛び移る。まるで小動物のように俊敏な身のこなしは紛うこと無きエルフの証だつた。生まれ持つた身体能力の差というよりは、彼女の幼少時から鍛え抜かれた運動神経と特殊な環境下で発達した類稀なる動体視力がそれを可能にしているのだろう。

それなのに、方向音痴とはどつこいつとか。クレミーは呆れたようになんかシャロンには見やる。

なんだかシャロンには出会つた時から呆れてばかりだな。

シャロンはそんな視線に気付かず、ばててしまつたクレミーを案

じて意識してゆっくりと歩くことにした。といつても、外周地點から長老の家までは数分と掛からないのだが。

「……長老様は、」

すると、これまで喜色満面に長老の自慢をしていたシャロンの表情に陰りが差した。ただしそれは悲しみとは少し異なって、どこか遠くを見るような落ち着いた面持ちだった。

「わたしのひいおじいさんにあたります」

何を言い出すかと思えばそんなことか。クレミーは若干拍子抜けしたが、おぐびにも出さなかつた。

「そうなんだ。それならシャロンも鼻が高いね」

クレミーが笑顔を見せるが、シャロンも合わせるように乾いた笑いを漏らした。

……返事を誤つただろうか。

「『めん。なにか気に障つたかな』

慌てて尋ねるが、シャロンは遠くを見たままだ。

「……クレミーさん。言つてませんでしたけど、わたし実はハーフエルフなのです」

「え……？　あ、うん。それってつまり、人間とエルフの間の子つていうことだよね？」

「ええ、父が人間で。ですが、わたしの両親はここにはいないのです。例の事件の後すぐに、幼いわたしを置いて村を出て行つてしましました」

「……なぜ？」

「それはわかりません」

しかしすぐにシャロンは小さく首を振つた。

「いいえ、本当はわかっているのです。おそらくは父のせい……。

人間だった父は、あの事件の後、この村にはいられなくなつた。そういうことだと思います」

七年前の事件はエルフと人間との間に確執を生んだ。エルフは人間を憎み、そしてそれはシャロンの父も例外ではなかつた。肩身の

狭くなつたシャロンの両親は、罪なき娘だけを置いて静かに村を去つたというわけだ。

「でも、どうしてシャロンを置いて行つてしまつたんだろう」

クレミーはふと浮かんだ疑問を投げかける。一緒に連れて行けばいいだけの話ではないか。

「あの頃のわたしはまだ自分がハーフエルフだということを知らなかつた。周囲の大人達もそのことを意図的に隠している様子でした。多分、わたしには黙つていようといつことになつていたのでしょうね。ですが、隠し通せるはずもありません。だって、成長の速度が違うのですから」

「え？ どういふこと？」

無邪気に尋ねるクレミーを、シャロンは「ふふ」と慈しむような優しい笑顔で見返した。

「森の中でわらしと出会つ前に、エルフの子供達を見ましたよね」「うん。……って、うわっ！ 僕の鞄！」

クレミーは昨日の出来事を思い出して、悔しげに唇を噛んだ。

「あ、すっかり忘れてました。後で取りに行かないといけませんね。……と、それは置いといて。実はあの子達とわたしは同じ年なのです」

さらりと言つてのけるシャロンに対して、クレミーは衝撃の事実にぎょっと目を剥いた。金魚のようにぱくぱくと口を動かし、したり顔のシャロンを穴が開くほど見つめる。

あり得ない、と言おうとして、踏みどじまつた。その言葉がシャロンを傷つけたりはしないだろうかといつ迷いが過ぎる。

「信じられませんか？」

「……うん」

クレミーの腰ほどまでしかなかつたあの少年達と、田の前にいるクレミーと大して背丈の変わらないシャロンの年齢が同じなどとは、到底信じられない。信じろといつ方が無理がある。だが、人間とエルフという種族差は、ときにクレミーの中のいわゆる『人間の常識』

を覆すなんてことも少くない。

例えば、ある人間が巨人族に向かつて『なぜあなた達はそんなに大きいのですか?』と問い合わせたとする。すると、彼らは腹を抱えて笑い出すことだろう。『何を言っている。お前達が小さいだけだと。人間は腑に落ちず、反論する。巨人も譲らない。

つまりはそういう次元の話なのだ。相手の常識を知り、その範疇で考えることなしには、別種族における相互理解の術^{すべ}はあり得ないのだろう。

「そもそも、エルフは『寿命が長い』という前提が間違っているのです。正しくは『成長が遅い』。特例のハーフエルフであるわたしはどうやら外見以外はすべて人間の方に似たみたいで、あの子達と同じ年なのにわたしの方が成長しているように見えるのも、それが理由なのです」

シャロンは驚愕するクレミーを尻目にからくりを説明した。クレミーは「なるほど」と手を打ち、続きを想像する。

特例故にエルフ達は彼女の性質を予想できなかつた。他の子供達と自分の成長の差に勘付いたシャロンは周囲の大人達を問い質し、結果、事実を知ることになつた、と。

クレミーが黙り込むと、シャロンは「話は少し変わりますが」と前置きした。

「長老様いわく、わたしの祖父は若くして戦死して、祖母も後を追うように伝染病で。そして両親は蒸発。……そんな具合で、兄弟もいないわたしは長老様とずっと一人ぼっちなのです」

紡がれる言葉の割にはシャロンは落ち込んでいない。諦めたような疲れた笑いが彼女の表面を覆つついて、何を考えているのかまったく読み取れなかつた。

どうして僕にそんな話をするんだろう。

クレミーはシャロンの顔色を窺いながら、何と声を掛ければよいか量りかねていた。元来、街の教導学校に通わず、城の中で専属の家庭教師に教育を受けていたクレミーは極端に他人との関わりが

少なかつた。だからなのか、じつはいつた深刻な場面に対する免疫のようなものが不足していた。

下手な慰めよりは沈黙を選べ。クレミーは口を閉ざすことしかできない自分に苛立つた。

「あ、そんなに気を遣うことはないですからね。わたしがお話ししたいのはむしろここからですから」

クレミーは横を歩くシャロンの方にちらりと視線を向けて続きを促した。

「長老様……いえ、おじいさまは魔術師なのです。それもエルフの中でも飛び抜けて優秀な」

「へえ。やつぱり長老というだけあるんだなあ」

クレミーは三角帽子に大きな木杖というお決まりの老魔術師の姿を想像してうんうんと頷いた。シャロンはそれを不思議そうに眺めていたが、すぐに視線を進行歩行に向け直した。

「わたしの魔術もおじいさまに教わったものです。おじいさまは、両親に捨てられて傷つき閉じこもり氣味だったわたしに魔術を授けてくださいました。その頃のわたしにとつてそれは唯一の拠り所で、夢中になつて練習に励みました」

「そうだったんだ……」

気になつていたのだ。なぜシャロンは村の外れで一人で暮らしているのか。今、その謎が少し解けたような気がした。

おそらくシャロンは初め村の中でも異端に近い扱いを受けていたのだろう。親という後ろ盾を失つた彼女に浴びせられる奇異の視線の威力は計り知れず、周囲からの砲火を直にその身に受けることになつた彼女は手近な拠り所を求めた。支えといつてもいい。本人はそれが魔術だつたと言うが、つき詰めればその先にある長老への自己顯示だつたに違いない。

二人が歩を進めるにつれ、点のように小さかつたルンカの像がしだいに大きくなつていいく。シャロンが真っ直ぐに銅像を目指したことからして、やはり長老の家は中心にあるようだ。

「でも、わたしがハーフエルフだからかな。あまり魔術は得意ではないのです。おじいさまも、そんなに練習しているのになぜ上達しないのかと不審がつていらつしゃいましたし」

シャロンは悔しげに肩を落とす。見るに堪えないクレミーはそのまま肩にぽんと軽く手を置いた。

「人間もエルフも等しく魔術を使えるんだ。混血だからできない道理はないよ」

「……そう、かな。ええ、きっとそうですね。ありがとうございます」「す、クレミーさん」

シャロンは救われたように、ため息と一緒に目を細めた。が、すぐにその笑みは固まって、「あら？ でもそれって、結局はわたしの才能がないってことになっちゃいませんか？」

クレミーを責め立てるような表情に変わった。

「いや、その、誰しも得手不得手があるっていうから……シャロンだからって……わけじゃないというか……」

しどろもどろになるクレミーの肩をシャロンはぐっと掴み返して、がくがくと前後に揺らした。

「やつぱり才能ないってことじゃないですかー！ ちょっと自分の魔力量が多いからってそれはひどくないですか？ 確かに魔力量も魔術には大切ですけれど、真に問われるのは術者の技術や器量！ つまりセンス！ っておじいさまがおっしゃってました！」

シャロンがヒートアップするごとに、クレミーの視界が大きく上下する。

「うわわわわ！ ジャア、シャロンには、センスがないんじゃ！？」

「ちがいますー！ わたしは体質ですー！」

そういう言い合ひうちに銅像の前まで来ると、シャロンは近くの長老の家らしき建物の前で足を止めた。

相当年季の入った大きな家で、シャロン宅の数倍はある。傷だらけの支柱には至る所に修繕の跡が見られ、長い歳月を感じさせた。

「人は中に入る。

「あ」

クレミーは最初に自分の想像していた家の内装とのギャップに目を丸くした。長老の家の中もきっと単純にシャロンの家を押し広げたイメージだろうと決めてかかっていたのだ。だが、実際には出入り口側半分が会議などに使われる集会場に、奥側半分が長老の生活空間になつており、その間は外布と同じ厚い生地のカーテンで仕切られている。ただし、半分のスペースといえども一人で暮らすには十分すぎるほどの広さだ。

この家は個人の所有物なのだろうか。クレミーは入口に立つたまま、きょろきょろと天井や壁にかけられた装飾品などを眺めた。

「村長になつた人は、任期中はこの家で生活することになっているのです。……ただ、うちのおじいさまはこの家を手放したくないばかりに村長を続けているようにも見えるのですよね」

シャロンが横からさらりとクレミーの疑問を解消する。すると奥からペドロが仕切りをぐぐつてのつそりと姿を現した。

「随分と遅かつたな」

「まあ、色々ありますて」

「そうか。たつた今、長老との相談が終わつたところだ。これから村人をここに集めて決定事項を伝えるつもりだ。お前さん達も同席してくれるか」

「了解です」

シャロンはこくりと頷いた。

ペドロは壁に引っ掛けた巨大な貝殻のような笛を手にとつて外に出ると、先を空に向け、思い切り息を吹き込んだ。汽笛のような間の抜けた低い音が村中にこだまし、それに応えるように一人また一人と人々から布を割つて立ち現れた。

「ここに村人全員は入りそうにないけど……」

クレミーは集会場に並べられた椅子の数を見て心配そうに呟く。

「各家の代表者一名だけが来る決まりになつていますから」

「そういうことか」

ざつと村の家の数を頭に思い浮かべてみた。ところが、どうにも數えにくい。なぜなら、ルンカの村は土地の広さの割に家の数が少ない、つまり密度が低いからだ。だから家の数が多いのか少ないのかも判断しがたい。

クレミーが脳内で計算を行つてゐるうちに、代表者が一堂に会した。シャロンと肩を並べるうちは感じなかつたが、エルフ族は比較的背が高い傾向にあるようだ。人間の平均身長を底上げしたような塩梅だ。

ああ、なんだかまた小人になったみたいだな。クレミーは居心地の悪さを紛らわすように、左手につけたバックラーをいじつた。

最上席に座つたペドロが一つ咳払いして注目を集める。

「諸君、前置き抜きで話す！ 人間どもがぬかしていた我らエルフの始祖ルンカが隠したといわれる秘宝だが、この森に潜んでいる可能性がある」

今更何を、という声が聞こえてきそうな表情で一同が眉根を寄せた。だだをこねる子供をなだめる時のような生ぬるい雰囲気が集会場内に立ち込め、村人達は嘲るようにペドロを見た。

「どういう風の吹き回しだ？ 宝なんて七年前までに幾度となく探

したじゃないか。さてはペドロ、もうボケたのか」

「ペドロさん、あんたあの事件を忘れちまつたのかよ。ここには宝なんてない。そんなでたらめ言つて、もしまだ村が焼かれたらどうするんだ。ちつたあ村のことも考えてくれよ」

次々と浴びせかけられる批判の文句を聞き流しながら、ペドロはふうと溜め息をついた。

「クレミーよ」

「はい？」

「例の話を頼む」

なるほど。だからここに居させたのか。

「いいんですか？ 確証はありませんよ」

「構わんさ」

クレミーはできれば口を挟みたくなかった。この状況で例の話をした際の村人達の反応が想像するにおそしかつたのだ。宝の存在さえも否定しているというのに、それ以上に突飛な内容を伝えれば相応の反論の嵐が待ち受けているに違いない。

「はあ。 実は……」

クレミーはしさか躊躇いつつも『ミトリアスの語つたルンカの史話を村人達に話して聞かせる。盗賊であったルンカ、村の誕生、そして地下に隠された秘宝。もちろんクレミーが皇族であることは伏せておきつつ、その他のことはシャロンやペドロの時と同じく伝えた。村人達は話の途中何度もか物言いたげに口を開きかけたが、ペドロが終わるまで一切の口出しを禁じたので最後まで清聴を保った。

「……という話を聞いたことがあります」

クレミーが口を閉じる。

村人達がペドロの方を見やると、彼は無言で頷いた。禁止を解除するという意味合いだ。

「しかし、なんと地下にあるとは。信じられん話だが、なるほど確かに地下は盲点だった」

「人間どもは地上ばかりに目を向けていたからな。我々も先入観に捉われていたようだ」

そこでペドロは勢いよく木机に手を突いて立ち上がり、一同を見回した。

「そして今回、その発掘作業を決行することになった!」

「……何?」

刹那の間ペドロの気迫に圧された村人達だったが、当然口々に反論を始める。

「貴様、まだそんなことを言つてはいるのか! 宝など、いたずらに人々の目をくらませ災厄を引き起こすだけの代物に過ぎんのだぞ!」

「先の反省を生かし、現在の安寧を守るのが生き残った我々がとるべきただ一つの道ではなかつたのか? 宝の存在を知らうとも、我

々のその姿勢には何ら変化はないはずだ」

すると何者かが部屋の仕切り布を分けて姿を現した。

「そう熱^{いき}り立つでない、若者達よ」

「長老様……！」

卵色の緩やかなローブを着込んだ老人、長老オイゲンは子供を諭すように優しい声で言った。その頭には三角帽子は乗っておらず、その細い手にも魔法の木杖など握られていなかつた。代わりに、指に何本か指輪がはめられているだけだ。

期待はずれの長老の格好に、クレミーはいささか落胆した。

「わしの父ルンカは生前、決して自分の過去を語ろうとしなかつた。ところが今回、父は盜賊だつたという話ではないか。されば、あれだけ素性を隠したがつたにも納得がいくというものじや。そして、父の宝は元より人間の財産。それを我らエルフが隠匿しているというのは、世の理に反するとは思わぬか。そうじやうつ、皆の衆「し、しかし！ 人間側はその宝のために村を……！」

「憎しみは何も生まれぬ。どちらかが落とし前を付けねば因縁は消えぬのだ。何より、わしには父の罪を償う責任があるのでじや」

村人はぐつと口を閉ざして俯いた。

その中でクレミーだけが別の点で驚きを隠せなかつた。

「あの、ちょっとといいでしようか。ルンカつてずっと昔に生きていた人ですよね。あ、エルフか。そのルンカが長老様のお父上というのは、時間的に合わないと思うのですが……」

オイゲンはぽかんと口を開けた。

「何を言つておる、旅人よ。ほんの数百年前の話ではないか」「え？」

「エルフは人間の何倍も生きる。ぬしらにとつては伝記で見る過去の遺物なかもしれんが、わしにとつてはついこの間の出来事よ」

ほつほつほ、とオイゲンは声を上げて笑い出した。

「ええええっ！？ エルフの寿命つてそんなに長いの！？」

クレミーは驚嘆してシャロンを振り返つた。確かに成長が遅いと

いう話は聞いたが、そこまで生きるとは思つてもみなかつた。

「ええ。おじいさまだけは、ちょっとぴり特別ですけれどね」

「そんな、数百年だつて……」

クレミーは衝撃の事実にしばし頭の整理の時間を要した。
もはや別次元の話だ。『ミミトリアスが伝記で読んだ人物が、たつ
た今日の前でにやにやと口元を緩めている老人の父親なのだ。それ
がどれだけ驚異的なつながりであるかは想像に難くない。魔術師ア
レンと初めて対面した時以上の驚愕がそこにはあつた。

「ともかく、事實を知つてしまつたからには、見て見ぬふりはでき
ぬ。皆の衆よ、ちよいとわしにその若い力を貸してくれんかの」
「しかし……百歩譲つて探すにしても、地下だけでは情報が足りな
すぎます！ 森中を掘り返す氣ですか！」

「なあに、宝の在り処の日星はついとる。手伝つてくれるな？」
自信満々のオイゲンの言葉に、村人達は一も二もなく頷いた。

長老オイゲンは村の魔術を扱える者の中からとりわけ優秀な者を選別し、急造の発掘隊を編成した。その中にはペドロの姿もあり、クレミーは少しだけ意外に感じた。

発掘作業は昼過ぎから行うといふことで、クレミーとシャロンは一旦郊外にあるシャロン宅に戻り、遅めの朝食を摂つてから、昨日入り損ねた公衆浴場に向かつた。

それは河川水を利用した露天風呂で、給湯には火の魔術を用いているのだと行く途中にシャロンが教えてくれた。

簡単に入浴を済ませ、再び長老家の前に集合した頃にはちょうど約束の時間になっていた。

「では行こうかの」

オイゲンを先頭に、蛇が這うように発掘隊がぞろぞろと森の中を進んで行く。その行程はついさっきクレミー達が往復してきた道と全く同じで、クレミーはだんだんとオイゲンの考えが読めてきた。

「この先つて、やつぱり……」

「ええ、そうみたいですね」

シャロンも同じ結論に至つたらしく、一人で顔を見合せた。

旧ルンカ村。

賊徒によって根絶やしにされた悪夢の村。

今朝見た焼け野原の光景を思い出し、自然、表情は硬くなる。

「ここじや

予想通り旧村に着いたところでオイゲンは足を止めた。村人達も半ば予想できていたようで、特に驚いている者はいなかつた。

シャロンは無残な村の跡地を見回しながら、

「おじいさま。この村、というだけでもまだ範囲が広すぎると思うのですけれど……」

心配そうな顔でオイゲンを見やつた。

「ほっほ。隠すといふからには大抵、目印となる物があるもんでな」とことことひよこのよつた足取りで村の中へと歩いていき、やがて中心まで辿り着くと、クレミー達の方を振り返った。

「常識的に考えたら、目印はこれであろう?」

「なるほど……！」

クレミーは感心の吐息を漏らした。

オイゲンが指差しているのは、腰から碎けたルンカの銅像だった。その下には当然、像を支える台座があり、台座の底は地面に突き刺さっている。おそらくその先には転倒防止用の銅板が埋まっていることだろう。重量がある上にがっちりと固定された台座」と銅像をどかしてまで、その下の地面を掘るうと考へる者はまずいない。そのうえ灯台下暗しという効果も望めるから、隠し場所としては最適だ。

「ルンカというのは、随分とずる賢い人だつたみたいだ」「うーん、それは肉親として喜ぶべきなのでしょうか……」

シャロンは考へ込む。

「盗賊としてはとびきり優秀だったみたいだし、とりあえず誇つていいんじゃないかな」

「悪い人は嫌いです！　悪いことをするから、悪いことが降りかかるんです！」

「ごめん……」

予想外の剣幕にクレミーは目をぱちくりさせた。

「そここの若いの一人。乳縁り合つてこゐるといひ悪いがの、ちょっとこつちへ来なさい」

「ちちくッ……！？　おおおじいさまー　わたしはそんなつもりではありませんー！」

ぱつと顔を赤くしてオイゲンの下へ詰め寄つて行くシャロンの後を、クレミーはさも他人事のように苦笑しながら追いかけた。

発掘隊として集めたエルフの魔術師達は銅像を囲むよつて円形に並び、それぞれ木製の杖^{ワンド}を構えている。

「これから村の者達で一齊にこの像を持ち上げる」「持ち上がる……つて、魔術ですか？」

クレミーは首を傾げた。

「そう、今回なら空中浮揚^{レベリテイト}じゃな。そなたは魔術に興味があるとシヤロンが言つていたから、近くで見ておるとよい」

言つが早いか、オイゲンは村人達に手で合図した。

がくんと地面が揺れ、半身だけの銅像がぶるぶると振動し始める。徐々に振幅が大きくなり、ほどなく巨大な手に引っ張り上げられるように像が上向きに浮かび始めた。すると、銅像の周囲の地面が四角形に盛り上がり、板らしき物が姿を現した。その面積は台座の底面の何倍もあり、明らかに銅像を支える以外の意図が見受けられる。「ほほ。これは予感的中じやの」

台座の下には人一人がやつと通れるくらいの縦穴があつた。空洞の奥は暗く深く、どこまで続いているのかは入つてみるまで見当もつかなそうである。

「長老様！ この銅像、思つたより重くて、横にずりすのは無理そうです！」

ペドロは片手で銅像に杖^{ホンバ}を突きつけながら、詰まつた声を上げた。見れば、他の魔術を唱えているエルフ達は皆額に汗を滲ませ、苦しげな表情を浮かべている。支えるだけで精一杯といった様子だ。

言葉で単純に浮き上がらせるといつても、実際のところ対象の質量や体積が無視されるわけではない。見えざる手を操るような感覚であるから、当然、効果の及ぶ範囲や効果の程度も術者の技術や魔力量に左右されるわけだ。

魔術と『魔法』は違うのだ。クレミーはシャロンの言つていたセンスの意味が少し理解できたような気がした。

「……仕方がないの。わしらだけで降りるから、お前さん達はわしらが行くまでそれを支えておいてくれ」

「わかりました。どうかお気をつけて」

ペドロは会釈すると、杖を握りなおして術に集中する。

オイゲンは相変わらずマイペースに、穴のあるところまで歩いていく。その後ろをクレミーとシャロンの二人が頭上の銅像にびくびくしながら付いて行く。

縦穴の縁には古びた縄梯子が引っ掛けであつた。オイゲンはちらりと梯子を一瞥すると、

「わしはちょっと腰が痛くなつたから、先に行つてくれんかの」

「……それ、本当ですか？」

疑うクレミーの肩を掴んでぐいぐい押し、強引に穴に詰め込む。

「この縄、大丈夫かなあ……」

長い年月を経て耐久力に若干の不安が残るくだびれた縄梯子に、おつかなびつくり片足を掛ける。ちょいちょいと体重をかけて様子を見ながら、もう片方の足を乗せた。

と、その時、鉤爪で地面に固定されていた縄梯子が音もなく根元からぶち切れた。突然、体の支えを失つてふわりと宙に投げ出されたクレミーは慌てて穴の縁を掴もうと手を伸ばすが、わずかに反応が遅れて惜しくも届かなかつた。

「あつ、ああああああ！」

暗く狭い縦穴の中を、梯子に足を引っ掛けたままの情けない姿勢で落ちていく。先の見えない恐怖のあまり上げた叫び声が暗闇の奥で反響して返ってきたのを、クレミーは情けなく思った。

*

「……あれ？」

だが、次の瞬間には既に地に足が付いていた。

遥か地底まで続いていると思われた縦穴は、しかし実は建物一階

分くらいの深さしかなかったらしい。単に中の土が黒っぽいので底
が知れなかつただけだつたようだ。

クレミーはほつと胸を撫で下ろして、洞窟の中を見回す。
穴を掘つて固めただけのそこは意外に広々としていた。特有の土
くささが鼻をつけ、クレミーはむつと顔をしかめる。

「やれやれ……老体に響くのう」

背後の足音に振り返ると、オイゲンが膝を折つて着地の体勢をと
つていた。続いてシャロンも上から降りてきた。どうやら縄梯子を
使わずに飛び降りたらしい。

「もしかして、先に行かせたのは僕を実験台にするために? ひど
いじゃないですか」

「なあに、拗ねるでない。若いうちの苦労は大切じゃぞ」
はあ、とクレミーは適当に相槌を打つて、

「しかし、よくあの高さから降りられますね。足、大丈夫ですか?」
天窓のごとく頭上にぽっかりと空いた穴から銅像の底が覗いてい
る。

先程、不慮の事故ではあつたもののクレミーも同様にあそこから
落ちてきた。とはいえ、いざ自分の意思で跳べと言われても、少な
からず躊躇いが生じるだろう。それくらいの高低差だ。

そのため、よわい数百を迎えた超絶老人が難なくそれを突破できた事
実には驚きを隠せなかつた。

「お前さんのようにろくに帝都も出たことのないボンボンとは育つ
た環境が違うということじゃよ」

「そんな、僕だって好きで皇子に生まれたわけじゃあ……」
つい反抗心が牙を剥ぐが、オイゲンに当たつてもどうしようもな
いのでやめた。

と、そこで、わずかに洞穴内に射し込んでいた外の光が消えた。
頭上の穴が銅像で塞がれたのだ。

「うわっ、真っ暗」

めつたに体験することのない、完全なる暗闇。

クレミーはシャロンのいるだるう方向に視線を向ける。

「昨日の火の魔術でこの暗闇をどうにかできないかな」

「やつてみます」

シャロンは人差し指をピンと立てると、腹に入れるようにふつと一息吐いた。すると指先に蠟燭サイズの火が灯り、ぼうつと球形に洞穴の中を照らした。そのおかげで、クレミー達のいる入口から奥にかけて、左右に両手を広げたくらいの幅の横穴が続いているのがわかった。

三人はわずかに湿った土の上を奥に向かつて踏み歩く。幾らもしないうちに突き当たりが見えてきて、すっと足を止めた。

「あれは……」

先頭を行くシャロンの咳き。何だ何だとクレミーが彼女の肩越しに前を覗くと、黒い大きな棺のようなものがおぼろげに闇に浮かんでいた。重厚な蓋は何やら文字の刻まれた紙の札で厳重に閉じられ、異様な雰囲気を放っている。

これは、呪文だろうか？　一体、中には何が……。

「これが財宝かな？」

「……他に見当たりませんし、おそらくそうでしょうね」

クレミーはさつと振り返つてオイゲンに指示を仰いだ。薄ぼんやりとした細長い人影から「開けてみい」と返ってきたのを確認して、棺に手をかける。

蓋にわずかに指先が触れた瞬間、前触れもなく札が燃え上がった。

「熱ちつ！」

ばつと反射的に身を引いたクレミーは驚きのあまり尻餅をついた。紙を火元に揺れる火炎が煌々と暗闇を照らす。

「お札がひとりでに……！　おじいさま、これつてもしかして！」

「魔術……いや、封印術かの」

腕を組んで静かに見守っていたオイゲンは冷静に分析した。しかしその声には平静を保とうとして無理矢理に焦りを押し殺しているかのような切羽詰まつた様子が、シャロンには感じ取れた。

ややあつて紙札が燃え尽き、洞窟の中は元の暗さに戻った。無防備となつた棺の蓋が無言で誰かが開けてくれるのを待つてゐるかのような不気味なオーラを醸し出している。

クレミーは少しひりひりする指先に息を吹き掛けながら、棺の中身についての思索を巡らせた。

詳しいことは分からぬが、このような攻撃的な魔術で封がされている以上、並みの財宝というわけではなさそうだった。下手をすれば、宝の持ち主（この場合はルンカである）にも危害を及ぼす危険性のある方法を敢えて選んだということは、そこまでして他人の手に渡るのを避けたかった、という主の意思もある。

それほどの財宝が隠されているというのだろうか。

クレミーは唾を飲み込むと、表面の焦げた棺の蓋を掴み、一気に開いた。今度は触れても何も起こらなかつた。ごとり、と鉄球を床に落としたような音を立てて蓋が地面に落下した。

クレミーとシャロンが中を覗こうと我先にと首を伸ばす。刹那、棺の中からすさまじい量の光が放たれ、見えざる力によつて一人は派手に吹き飛ばされた。それぞれ反対側の洞窟の土壁に叩きつけられ、地面に崩れ落ちる。

「アリック
『喂じや！ 気を付けなさい！』

クレミーの耳にオイゲンの鋭い声が飛び込んできた。しかし発光に目をやられて、気を付けようにも何が起きているのかすら把握できぬ。

とつさに目を閉じたオイゲンは幸いにも視界を奪われずに済んでいた。その視線は次に起こることを見逃すまいと真つ直ぐ棺に注がれている。

すると、オイゲンの言葉を裏付けるように、棺の中からゆらりと何かが起き上がつた。五体を有する謎の人形はひどく機械的な動作で棺から這い出ると、腰の辺りから何かを抜き取つた。

それは剣だつた。鏽びて使えなくなつた、短剣。

視界が回復してくると、徐々に人形の正体があらわになつていいく。

『服を着た骸骨』といえば理解できるだろうか。かなりの時間を経て全身のあらゆる肉を完全に削がれた白骨が、薄汚れたぼろ切れのような衣服を引っ掛けで暗闇に仁王立ちしている。

異様な光景だった。

亡靈？ それにしては実にリアル。

骸骨はさながら牢獄から放たれた死刑囚のように不気味な殺氣を纏いながら、ゆっくりと動き出した。

「え……えつ？」

未だに状況に付いていけないクレミーの眼前に、骸骨が迫る。剥き出しのか細い指先に握られた短剣ダガが高々と振り上げられるのを、クレミーは夢を見ているような気分で見上げた。風を斬りながら素早くそれが振り下ろされる瞬間、クレミーははっと我に返り、慌てて横に転がった。

苦し紛れの回避は、しかしづかに間に合わず、肩口に鈍い痛みが走る。斬られた、というよりは荒削りの岩石で殴りつけられたような感触。刃の鋒び切つた短剣ダガはもはや刃物としての特長を失い、単なる粗雑でみすぼらしい鈍器と化してしまっているようだ。

「くつ！」

膝立ちで起き上がったところに、骸骨の蹴りが飛んでくる。反射的に両腕を交差させてガードしようとすると、突然、骸骨が横合いに吹っ飛んだ。大小様々な白骨がバラバラに地面に散らばり、何事もなかつたように沈黙する。着ていたぼろ布がその山の上にぱさりと舞い落ちた。

クレミーはふと足下に転がってきた頭蓋骨に目をやると、そこには木製の矢が一本突き刺さっていた。先端に鏃が見事に骨の壁を打ち抜いている。

矢が飛んできた方向 すなわちシャロンの方を振り返ると、彼女はいつの間に取り出したのか、背中の大弓を骸骨に向けて構えていた。

「シャロン！」

「まだです、クレミーさん！」

キツと睨みつける視線の先。たつた今、渾身の一撃によつて崩れ去つたはずの骸骨が、

「……は？」

元通りに立ち上がつていた。そして服を失い裸となつたことでさらには怪異さを増している。

屍が動き出しだけでも到底信じられない光景だが、そのうえ、それは一度頭をぶち抜いたにもかかわらず再び起き上がりってきたといつ。

一体何がどうなつているんだ。

「まさか……不死身とか、言わないよな」

不死身も何も既に死んでいるはずなんだけど、とクレミーは苦虫を噛み潰しつつ鞘からウォーキングソードを抜いた。

そこで不意に気付く。

「あれは……」

よくよく目を凝らすと、骸骨の全身から赤っぽい蒸氣のようなものが吹き出している。

違う。

赤が骸骨を包み込んでいるのだ。それはまるで、一つ一つ独立している骨片をつなぎ止めて、意のままに骸骨を操つてゐるかのような役割を果たしてゐる。赤い波動は不気味に波打ち、禍々しく蠢く。正体を見極めんと目を細めるクレミーに向かつて、骸骨は勢いよく短剣ダガを振るつた。横廻ぎの斬線をクレミーはバックステップで避け、がら空きの肩口に思いきり袈裟切りをお見舞いする。裸の骨は意外に脆く、切つ先は肋の辺りまで届いた。

そのまま倒れるかと思いきや、骸骨は頼りない両足で踏ん張つて、それを堪えた。断ち切つたはずの左肩も謎の引力で形を保つたままだ。

「くそつ…」

舌打ちするクレミーに再び凶器が迫る。長剣で払おうと、柄を持

ち上げようとして、しかし抜けない。

とつさに左手のバックラーで受け止めるが、予想以上の衝撃に腕が痺れる。クレミーは痛みに顔を歪めながら、長剣の柄を強く握り締めると、骸骨の脇腹を蹴飛ばして抜き取った。

そして大きく後退して距離をとる。

「大丈夫ですか？ クレミーさん」

慌ててそばに駆け付けたシャロンが心配そうにクレミーの顔を覗き込んだ。彼女のすぐ傍には指先程度の小さな火の玉がふわふわと浮かんでいる。なるほど、遠隔操作も可能らしい。つくづく便利だ。

「はあ、はあ……。まあ、なんとかね」

「そこ、肩から血が……」

言われて見ると、先程骸骨に斬られた、いや擦られた肩の傷から出血していた。

「これくらいなら大丈夫。傷には慣れてるから」

祖父デミトリアスとの稽古ではじょっちゅう擦り傷をこしらえていたものだ。そういう意味での発言だったのだが、何を勘違いしたのか、シャロンは一層心配そうな顔で、むしろ哀れむような視線でクレミーを見つめていた。

「ともかく

目の前の敵をどうにかしないと、とクレミーは骸骨を睨む。ふつと深呼吸すると、体^{たい}を傾け、盾を持つ左手を前に、剣を握る右手を肩の高さまで上げる。相手に晒す面をより狭くし、狙いにくくなるという用論見を含んでいる。

護身の構え。

斬り殺すよりも、自身を護ることに重きを置いた剣術である。何よりも優先すべきは、自分の命。それがデミトリアスの教えであり、彼から刻み込まれた戦術でもある。

死んではならない。

クレミーの蹴りで倒れていた骸骨が起き上がる。錆びた短剣^{ダガー}が火球の明かりできらりと光った。

「待て、クレミー」

「え？」

とんと肩に乗る手。オイゲンはちりつと骸骨に手をやると、クレミーに囁きかけた。

「指輪じや」

「……指輪？」

「やつの右手を見てみい。あれが魔力の発生源じや」

妖氣を漂わせながらゆつくりと歩を進めてくる骸骨。その右手に注目すると、確かに赤い指輪をはめている。さらに観察すると、その指輪を中心に全身を包む得体の知れない靈氣は発生していることが分かつた。

「じゃあ、あの指輪を壊せば……」

「いや、壊すのは避けたほうがよいじやひつ」

「なぜですか？」

不満げな声を漏らすクレミー。

「あれは呪いの指輪じや。元来、呪われた品物アイテムというのは手にした者に強大な力を与える代わりに、もしそれが壊れた時、所有者に相応の不幸をもたらすものでな。ただ、この場合所有者が誰なのかは定かでないが……とにかく、壊してはならぬ」

「そんなん……」

本気で殺しにくる相手にそんな手加減が通じるだろつか。

「さて、来るぞ」

「うわっ」

クレミーは意識を目の前の骸骨に向け直した。

骸骨は不自然なほどにひどく人間的な所作で短剣を振り回していく。それらを左右の剣と盾で打ち払い、受け流しながら、機会を窺う。

数瞬の攻防。

金属どうしがぶつかって生じる火花が隠微に骸骨の顔面を照らす。
がらんとう
伽藍堂の瞳は暗く影を落として、ただただ空虚な闇を返してくれる。

すると骸骨はなかなか決まらない攻撃に業を煮やしたのか、ある時、一撃必殺を狙つて短剣^{ダガ}を大きく引いた。

これ待つっていた。

弾丸のごとく繰り出された高速の正面突きを、クレミーは受けずに体を捻るだけで避けた。貫くべき対象を失つて虚しく伸ばされた腕、その先にある白い手首を狙つて、思い切り長剣を振り下ろす。嫌な音を立てて手首は切断され、地面に転がった。その途端、骸骨はぎしりと全身を軋ませて、文字通りその場に崩れ落ちた。

再生する気配はない。

「やつた……」

クレミーは安堵の息を漏らすと、剣を鞘に収めた。幸いだったのは、敵が獣などの類ではなく人型で武器を扱う者だったということ。でなければデミトリアスに習つた剣術も役に立たず、さらに苦戦を強いられていたことだろう。

光を失つた指輪を骸骨の指から抜き取り、オイゲンに向き直る。
「なるほどな、あのくそ親父の考えそつなことじや」

「えつ？」

「その指輪はルンカの魂を封じた呪いの品物^{アイテム}なのじや。そして、これは仮説だが……おそらくルンカはその命が燃え尽きる前にこれまで自分が集めてきた財宝を何者かに引き渡した。そのうえ、殊更に『財宝は森に隠した』とでも吹聴して回り、裏では、棺にこもつて自身に封印術を使使して、抜け殻の骸骨をもつて財宝^{きやつ}を狙つてやって来た賊を迎撃つ、ど……ふむ、独占欲の強い彼奴ならではの遊び心とでもいったところかのう」

オイゲンは嬉しそうに手を細めた。その瞳には無残に崩れて散らばる白骨が映つている。

「あの、長老様。なんというか……申し訳ありませんでした」

「うん？ 何を謝るか」

「長老様のお父上の遺骨を……あんなふうに扱つてしまつて……蹴り飛ばしたり、切断したり、と常識的に考えたらとんだ背徳者

だ。クレミーはがくくりと肩を落とすが、オイゲンはそれでも笑っている。

「気にする」とはない。降りかかる火の粉は払わねばならんからの。
彼奴(きやつ)もちつとは反省したことじやる(りう)」

すると、入口の辺りにぱあっと光が差した。ペドロ達が再び銅像を持ち上げてくれたのだろう。

「さて、出ることにしようかの」

「えつ、でも……ルンカの亡骸(ぼうがい)は……」

「それもそうじゃの(う)」

オイゲンはまるで虫をのけるようにしてふわりと手の平を払った。すると、散り散りだつた骨片が一箇所に集まり、元の人の形に取り戻してから、棺の中に納まつた。

「元よりまともな死に様など期待しちゃおらんだろう。悪党への供養はこれで十分じゃ」

そう言い残してオイゲンは穴のある方へと歩いていく。

杖もなしに魔術を？ とクレミーは初め疑問に思つたが、すぐに思い当たつた。オイゲンのはめた指輪である。きっと杖の先に付いている水晶と同じ材質なのだろう。

同様に、ルンカが自身の魂を指輪に封じることができたのにも納得がいった。

三人が穴の下まで来ると、ちょうどよく上から縄梯子が降つてきた。気の利いた誰かがわざわざ代わりの物を取つてくれたらしい。感謝しながら、オイゲン、シャロン、クレミーの順で梯子を上る。

穴越しに円い空を眺める。今にも雨が降りそうな、頼りない曇り空だった。

あれ、さつきと何かが違うよくな。

最後尾のクレミーが登つている途中に、地上から「うひやあつ！」とシャロンの悲鳴らしき声が聞こえた。心配になつて急いで梯子を駆け上がろうとするが、突然、上から何者かによつて手首を掴まれ、

一気に引きずり出された。

「あいたた……」

何だよ、もう。

「オイ、動くなよオ

「……！」

無様に地面につつ伏せに倒れたクレミーの首筋に、すうっと冷たい金属の感触が走った。

act - 07 盗賊と共に（前編）

お待たせしました！

第七話、お楽しみください。

静止は一瞬。

クレミーが反射的に顔を上げようとすると、視界の端にちらりと銀色の刃が映った。

「動くなつてエ。びっくりして斬つちまうから」

男は脅しではなく本氣で心配しているようだつた。自分の生き死にを他人に握られる感覚。それはまるで操り人形にでも成り下がつたようで、とてもなく氣分が悪かつた。ある種の嘔吐感ともいえる。迫り上がつてくるものを抑えるように、クレミーはぐつと息を飲んだ。

「……どなたですか？」

問うと、男は「さアな」と、即答した。

簡単には名乗らない辺り、案外小物ではないのかもしれない。

「まさか、七年前の犯人……？」

「それよりこつちの質問に答えてくれよな。アンタ、こんな辺境まで来て一体ナニモンだ？ もしかして家出かア？」

「…………あー」

そのうえクレミーの正体は筒抜けらしかつた。とんでもなく不利な状況だということは理解できた。

家出、か。

そんな帰ることを前提にした緩い覚悟と一緒にされたのはかなり心外だったが、それはさておき、情報の伝達があまりに速すぎはしないだろうか。皇城を発つてからまだ三日と経っていないというのに、当たり前のようにクレミーの下に刺客がやって来るのは一体どうなつてているのか。

「目的は僕か？」

相変わらず地面を見つめたまま、小声で問い合わせた。

不幸にも、この敵には全くと言つていいくほど油断がない。クレミー

ーが少しでも動きを見せれば、その都度突き付けられた剣先が反応してわずかな隙すらも与えまいとするのだ。だから先程から敵の顔すら確認できずに無様に地を舐めさせられている。

「それもある。でもまア、今は、」

男はクレミーの様子に気を遣いながら慎重に膝を折つて、強く握りしめた彼の手の中からルンカの指輪を取り上げた。

「こっちも重要なだな」

「どうして指輪のことまで……」

「いや、こればかりは偶然としか言えねエんだな」

男はクレミーの背中から足をどけると、近くで控えていた部下に「テキトーに縛つとけ」と言い残して去つて行つた。ファルシオンを無造作に仕舞う振り返り様、羽織つているロングコートが翻つて風になびいた。

一瞬だけ見えたのは、獰猛な赤い瞳。

はて、盗賊、赤目……聞き覚えがあるような、ないような。

子分と思わしき数人が麻縄で後ろ手に縛り上げていく間、やつと顔を上げることができたクレミーはシャロンとオイゲンの姿を探した。最初に見えたのは、ペドロたち発掘隊が一箇所に集められて数人の賊に囲まれて座らされている光景。それ自体は当然 無論、この異常な事態の中では正常な対応だという意味で なのだが、しかし気になったのは、その中の誰も魔術を唱えているふうはないという点だ。そして今、クレミーが縛られているのは例の銅像の真下にあたるわけで。

そこでクレミーははつとして頭上を見上げるが、そこには陰鬱な曇り空があるだけだった。

そんな……銅像はどこへ？

なんとなく後ろを振り返ると、穴を隔てた向こう側に巨大な銅像が転がっていた。

確かにペドロが横にずらすのは無理だとか言つていた気がするが、結局成功したのだろうか。

「クレミーさん！」

呼ぶ声に視線を戻すと、シャロンとオイゲンが少し遠くに立つていた。すぐそばにはあの赤目の男もいる。特に彼らを拘束している様子がないところからして、大方クレミーという人質をもつて抑止力としているのだろう。

赤目が口を開く。

「あの皇子は俺様が貰つて行くからな。別れが必要なら今のうちに済ませておけよオ」

赤目の言葉に、オイゲンがぽんと手を打った。

「おお思い出した。そういうえばクレミーとは帝国の皇子様の名前だつたのう」

うわ、またバレた。

それにしても、こんな状況だといふのにオイゲンはいやに冷静だつた。完全に敵に屈しているのか、それとも単にマイペースだけなのかもは判然としないが、クレミーとしてはちょっと憎らしかつた。赤目はそんなクレミーにはあまり興味がない感じで、

「ところでだ。コイツをはじめたらどうなる？」

と、ルンカの指輪をオイゲンの前にちらつかせた。

「ふむう。わしも先程見つけたばかりでな、詳しいことは何もわからんのだよ。だがのう、あの大悪人の魂を封じたとなれば、あまり縁起の良い品でないのは確かじやろうよ」

赤目はしばらく手の上で指輪を弄んでいたが、「そうかア」と残念そうに呟いて、ぴんと爪で指輪を弾いた。それは放物線を描いてシャロンの目の前に飛んでいき、そのまま地面に落下しそうになつたところを慌てて彼女がキャッチした。

「ンな危ねエブツは売り物にもなんねエし、持つてるのも気味悪いから返すぜ。……そういうことだ、じゃアな」

「……あのー」

「ん?」

立ち去ろうとする赤目をシャロンが震える声で引き留めた。

*

車窓を流れていく風景をぼんやりと眺める。見渡す限り草原しかないのどかな街道上を走る電動車のスピードはかなり遅い。例えるなら早歩き程度だらうか。

気がかりだつた曇天の空も南に向くにつれてしだいにうららかな晴れ模様へと移り変わり、心地よい春の陽気をたたえている。

「はあー……」

助手席に座るクレミーはそんな穏やかな景観とは対照的に海よりも深い溜め息を吐いた。

エルフの森を発つてから三十分程。後部座席からはシャロンと口の笑い声が絶えず聞こえてきて、自分がどういう状況に置かれているかを忘れそうになる。忘れそうになるが、決して忘れる事はない。なぜならクレミーが動こうとするたびに拘束用の繩が手足に食い込んできて、嫌でも現実に立ち返らざるを得ないからだ。

「あはははっ！」

何度も分からぬシャロンの笑い声。半簞巻き状態のクレミーには後ろを振り返ることもままならず、彼女たちが一体何の話題で盛り上がっているのかも把握できない。

ちよつと悔しい。それに、

「どうしてシャロンは自由なんだ……？」

僕はぐるぐる巻きなの。

「はあー……」

もう一度嘆息すると、運転席のプチがクレミーの様子に気づいて

「おや」と声を上げた。

「悩み事でござりますか？ 皇子」

「……僕はもう皇子じゃないですよ、モンティさん。それに、悩みとこう程のことでもないんですけど……」これは、一体どうなっているのかと」

「これ、と言つと？」

モンティと呼ばれたことに機嫌を良くするプチ。

「今の状況ですよ」

そう、これはおかしい。

日下、クレミーとシャロンは、団長口口・レッドアイ率いる赤目盜賊団・ギャングによつて『拉致』それているのだ。なぜか？ それはクレミーがグスタフ・ドイルの血を引いているからに他ならない。盜賊団は本来別の強盗・ジンでエルフの森近辺の街に滞在していたのだが、そこで偶然出会つた情報屋から『クレミーが城を脱して一人で森にいる』という情報を買い取つた。そして口口達はクレミーに商品価値を見出だし、旧ルンカ村で難無く彼を誘拐することに成功したというわけである。

そしてあの時。

『……あの！』

『ん？』

『わたしも……わたしも連れて行つてください！』

『…………まあ、俺様は別に構わないぜ』

と、こんな具合で、どういうわけかクレミーについて行くことを決めてしまつたシャロン。彼女は長老オイゲンに『皆さんにはようしく言つておいてください』とだけ言い残すと、そこで思い出したように村に一度帰り、数分もしないうちに戻つてきた。その手に、クレミーが例の悪ガキ大将パウに奪われた鞄を持つて。

『あはは、危うくこれを忘れるところでした。あ、それと、パウ君から伝言です。《アイツにでんごん？ うーん、じゃあ。いきなりおそつてわるかつたな。ニンゲンにもおまえみたいなやつがいるつ

てわかつたよ。いつかおれとしょうぶしろよな！……これでいいや。あ、また、やつぱり『いじ』のだけで！』……だそうです。

かつたですね、仲直りできてつ』

『つて全部伝えちゃだめでしょ！　それに勝負つて、彼が大人になる頃には僕は絶対死んでるから！　無理だから！』

そしてそのまま口々に強制連行され、現在に至るというわけだ。
「氣のせいではないですか。きっと疲れているのでしょう」

真面目なブチに言わるとそうなのかと思ってしまいそうになるが、しかし流されはいけない。どんな人格であれ、ブチも盜賊団の一昧であることには変わりないので。

「なんだかなあ……」

盗みの賊というほどであるから、例えば、人殺しを露とも厭わないとか、そういうた非人道的で残忍なものをクレミーは想像していた。

だが、この赤目盜賊団を見る限りでは、そのイメージは必ずしも当てはまらないようだった。そう、敢えて彼らを例えるなら『肉を食する修行僧』といったところだろうか。悪イイ奴……というより

は、むしろ、善い自分を嫌い、だからこそ悪を目指す善人とも。それにしても。

別れ際にペドロが話していたことを思い出す。

『……あの赤目のガキと側近の眼鏡野郎には氣をつける。特に眼鏡は、この俺の背後を易々と取りやがった手練れだ。あいつにはまるで気配という物が存在しない。さながら静かな湖面をざざ波一つ立てずに滑り抜けるような、奴自身の存在を微塵も感付かることのない完璧さで相手を殺すことが可能だろう。もう一人、赤目だが……あいつの剣さばきは特殊だ。何メートルも離れた地点から、あの重い銅像を丸ごと吹き飛ばしやがった。……まあ、この先どういう扱いを受けるかは分からんが、用心は怠るなよ』

そういえば、結局、ペドロさんや長老様とはちゃんとした別れが

できなかつたんだよなあ……。

それに、用心つていつても。

クレミーは再度、シャロンの笑い声に耳を傾けた。彼女は飽きもせず口々と何事か話しては、ころころと笑つてゐる。時折、すし詰めになつて寝転んでいる盗賊団員のいびきも聞こえてくる。そこに殺伐とした空氣は、一切感じられない。

これが人質を積んだ護送車のあるべき姿なのだろうか、とクレミーは人質ながらに呆れ返つた。すう、ともはや癖になつた溜め息を溜めようとした矢先に、

「おい、皇子」

「うふわあいっ！」

突然、耳元で口々の声がした。吸つていた息を吐くのと応答が重なり、思わず気持ちの悪い声が出た。口々はしばらく怪訝な顔でクレミーを睨んでいたが、すぐに気を取り直して、

「俺様は決めたぜ」

「な、何を？」

妙に悟りきつた感じの口々の言い方にクレミーは些か不安を覚える。

「確かに、最初シャロンちゃんが俺様達に付いてくるつて言つてきました時にやア、皇子程ではねエにしてもそれなりに金になるだらうと踏んで、了承してしまつたことは認める」

何の話だ？ とクレミーは首を傾げたが、一応、黙つて最後まで聞くことにした。

「だが俺様は気付いた。あんな健氣で純真で可愛らしい女の子をどこの馬の骨とも知れねエ貴族どもに売り飛ばそつなんざ、世紀の大悪党として許されざる行為だつたつてよオ」

「えつと、つまり？」

全く意図が読めなかつたので、やはり早々に結論を求めることが出来た。

「つまり、シャロンちゃんを俺様によじせつてことだ」

どうしてそうなる。

「冗談なのか本気なのかはさうぱり分からなかつたが、ただ一つ確実なことがある。

「口口……つていつたかな。君は大きな勘違いをしてるよ」

「あア？」

「ひつ」

口口が凄むと、クレミーは蛇に睨まれた蛙のように縮こまつた。一度は殺されかけた相手だ、恐れるなという方が無理というもの。このような身動きもままならない状況では、クレミーの首などいつも飛んでもおかしくはないのだ。それこそ口口の機嫌という不安定な要素に左右されてしまう。他人を介して自分の命を掌握するという奇妙な図がここにできあがつてしまつたわけだ。

ていうか、目が怖いんだよ、この人……。

クレミーは内心びくつきながら、それでも必死に己を奮い立たせて、震える声で話を続ける。

「そもそもシャロンと僕の間には君が考へているような関係は一切ないよ。なんてつたつて、つい昨日出会つたばかりだからね」

そして、クレミーが城を出てから一日半しか経つていない。改めて、ヘルフの村での出来事の濃さを思い知らされる。

「昨日……だとオ？」

「え？」

口口の表情が見る見る怒りに染まつていく。

「うわ、なんで。僕、全然悪いこと言つてないのに。もしかして、消そうにも消せない壮大なトラウマとか忘れ去りたい苦々しい過去とかに無意識のうちに触れちゃったのか。いや、そんな具体的なワードは何も口走つていないだろうし、何よりこの人の場合はそういう怒りではなくて、どちらかといふと決闘に負けて相手を憎む騎士のような悔恨の念が混じつて……。

やばい、死んだかも。

どうせなら痛みを感じないうちにすぱつとやつちやつてくれ、と

クレミーは思い切り田を睨つた。

「嘘だな」

「…………はい？」

何を言われたのか、すぐには理解できなかつた。

「シャロンちゃん程の新鮮天然食べ頃娘が、たつた一日でンなオメエみてエな黒々へたれもやしになびくとは思えねエ」

「ああ、嘘つてそういうこと……。にしても、例えが独特だね。ああ、もしかしてお腹減つてるの？」

「まあ、そんなとこだ。予定外の仕事のせいで食糧が尽きちまつてな。街に着いたら、たらふく食つてやるぜ」

口口は田を細め、前窓から覗く街の影に思いを馳せた。

やつぱり、こいつって話してみるととても悪賊には思えないな。同年代といつとも相まって、クレミーは口口に対しても少なからず親近感のような感情を抱いていた。^{ていで}同族意識とも言えるかもしれない。いかにも自由主義といった体の口口に憧れていのかもしぬなかつた。

そんなことを考えていると、

「赤目さん赤目さんっ」

「ん？ どうしたア？」

シャロンは後ろからひょいりと顔を出すと、街道の向こうを指差した。

「あの街に向かっているのですよね。着いたらどうする予定ですか？ やつぱりまずは探検ですか？」

「はア？」

「前におじいさまに聞いたのですけれど、あそこは『布の街ソノヒ』といって、服飾業が栄えているそうですね。服屋さんですよ。わたし一度行ってみたいなー」

ぽかんとする口口を置いて、シャロンはさきあきらかに田を輝かせながら矢継ぎ早に話を続けた。心なしかその頬はほんのりと朱色に染まっている。

「もしかしてシャロン……わくわくしてる?」「し、してないですよ。子供じゃないですよ」

「でも、僕は帝都を出た時かなりわくわくしてたよ。うん、今もだ」

「そ、そう? あ、えっと、本当はわたしもわくわくしています」

シャロンは単純な子だった。

「でも……子供じゃない、か。シャロンっていいつつ?」

何気なく口にしてから、いつだつたかマージョリーに『レディーに年齢を尋ねるのは野暮な男のすることよ』と仕込まれたのを思い出した。

しぐじつた、とクレミーは顔をしかめるが、当のシャロンは全く気にしている様子もなく、

「うーんと、いくつだつたかな。たぶん、今年で二十歳になる^{はたち}いだつたと思います」

「えっ」

クレミーは思わず絶句した。

「どうかしましたか? クレミーさん」

「いや、別に……何でもないよ」

年下かと思つてた、とは言えず、適当にお茶を濁した。

「口口……は?」

名前を呼ぶことに躊躇を覚えつつも、付けるべき敬称も分からないのでもそのまま問に掛けたが、口口は敏感に察したらしく。

「口口でいいぜ。今、二十歳だ」

「つてことは、僕が最年少になるのか」

年の上ではそうかもしれないが、精神年齢においてはクレミーは他の二人には決して劣つていなければならないはずだと願いたかった。もちろんこれも黙つていたが。

クレミーはふと窓の外の風景に目をやつて、

「それはさうと、この電動車……どうしてこんなこまくくつとしてるの?」

首だけ動かして口口を振り返ると、彼はちゅうと拗ねたように口元についた。

をどうがらせて、

「仕方ねエだろ。放電石の残量があとわずかなんだから」

「あ、使い捨ての石を使つてるんだ」

「ツたりめエだろ。蓄電石なんざ高くて手が出せねエっての」

「あー、うん。そうかもね……」

皇城育ちで、充電式である蓄電石しか見たことがないクレミーに
とつては、使い捨て式の方が物珍しいというのが本音だった。だが、
皇家や貴族の生まれでもない庶民からすれば、そもそも動力に電気
を使うという考え方 자체が贅沢なのだ。それこそ、明かりには火を、
移動には徒步か馬をと相場が決まつていてるように。

卑しみなどは抜きで、事実として、クレミーと一般人との間には
文化的相違が横たわつてゐる。分かつてはいたつもりだつたが、こ
ういった何気ない会話の中で再確認させられたことで、よりクレミ
ーの心に引っかかった。

沈思するクレミーに代わつて、シャロンがかくんと小首を傾げた。
「でも、どうしてわざわざ電動車を……？ 馬車の方が安上がりで
はないでしょうか？」

シャロンが顎に指を当てる、不思議そうに考え込むのを見て、口
口はここぞとばかりに自慢げに手を広げてみせた。

「常識的に考えればそう思つだろオ？ だが違うんだな。俺様達く
らいの大所帯になると、馬車だとどうしても一台以上に分けなきや
ならぬエわけだが、このサイズの電動車なら一台ありや全員乗れる
んだ。つまり、もし一頭立ての馬車を一台使つとすれば、放電石一
個当たり馬四頭の価値があるつてことになる。それに、仕事柄、襲
うにせよ逃げるにせよ分散するのはあんまり望ましくねエだろ？
その辺りを考慮に入れると、馬より石使つた方が断然おトクつてわ
けだ。分かったかい、シャロンちゃん」

なるほどそういうことですか、ヒシャロンは手を打つた。

「つつても費用が掛かるのには変わりねエし、この先団員が増えれば増えるほど負担も大きくなる。……そこで最近、俺様は思つんだ

「 よ 」

「 若 」

半ば遮るような形で運転席のプチが口を挟んできた。その顔はどこか焦りや寂しさのようなものをたたえている。

「 …… 到着でござります 」

気が付けば、目と鼻の先に街の外壁があった。見上げる高さの表門には刺繡を模したポップなロゴで『布の街ソノヒュウノソト』と刻まれてあり、服飾業を売りにしているといつシャロンの話を裏付けていた。

「 お、いつの間に。よオし、降りるぞおめヒラ 」

「 ういーす 」

後部座席で雑魚寝している十人弱の団員達に声をかけて、一行は電動車を降りた。

act - 07 盗賊と共に（後編）

次回も間が空くかと思こますが、未永くお付き合ひください（^ ^）

v

「わあ……！」

「す、すじい……」

シャロンとクレミーは正門をくぐるなり、感嘆の吐息を漏らした。布の街ソミH。

曲折の多い大通りには所狭しと商店が立ち並び、その間を縫うよう設けられた露店では店主が道行く人々に向かつて声を張り上げている。人々には肌や目の色の違いこそあれど、「ソミH」という名の一つの共同体を形成しているという点で一体感を醸している。古街の趣とでもいうべきものがそこにはあった。

「後は任せたぜ」

ロロは部下達に荷物下ろしを命じてから、氣だるそうにせつきてクレミーの肩を荒々しく掴んだ。

「なアーに見とれてンだ。まさかセントラルバニアから一度も出たことがないワケじやねエだらうが」「

「うーん……。確かにないわけではないんだけど、ただ、あつたのが他国の王に謁見だと王族どうしで食事会だとばかりだったから、なんといふか……」

目線を街の景観に戻す。

「ほら、帝都つて隅から隅まで計算し尽くされた上で建設されるから、全体的にかなり整然としてるでしょ？　だから対称的に、ソミエみたいな雑然とした街並みはとても新鮮なんだよ、僕にとつては」

ロロは「はあん」と興味があるのかないのか分からぬ相槌を打つと、次はシャロンに話を振った。

「わたしの場合は単に森から出たことがなかつたので。……といふより、出たいと言つても御祖父様がお許しなられなかつたのですけれど」

シャロンはぱくっと頬を膨らませたかと思うと、すぐ近くにあつた赤レンガの家の外壁をさすりながら首を傾げた。

「ところで、この街の人々はこのような粗悪な家屋で暮らしているのでしょうか。風通しも悪そうですし、何より地面に直に建つては、せつかく蓄えた食糧を魔物達に荒らされてしまします」

「シャロン、それは森での常識でしょ……」

クレニーはやれやれと首を振ると、後ろを振り返った。

「そういうえば、口口。君達は盗賊団なんだろう？ こんなふうに正面から堂々と街の中に入っちゃって大丈夫なのかい？」

口口は一瞬何を言つて居るのか分からぬといつたふうに眉を寄せたが、すぐに「ああ、そういうことか」と頷いた。

「ヒヤハハ、わかつてねエなクレニー。確かに公的には俺様達や悪党だが、ソミエみたいな中小の街の市場経済にとっちゃやあ盗賊や海賊なんてのはこの上ない潤滑油なんだぜ」

「え、どういうこと？」

口口は不敵に口を歪め、大きめに両手を広げて見せた。どうやら彼の癖らしい。

「あるところに果物屋がいたとする。そいつは普段は街に店を構えて果物を売つているんだが、まれに政府が運営する他所行きの貨物用馬車に果物を載せて輸出することがあるんだ。ところがある日、道中で馬車が盗賊に襲われて品物を全て奪われてしまう。当然ながら、果物屋は本来得るはずだった収入を失い、それについて政府を問責するだろ。警備に不足があった責任のある政府は反論できず、仕方なく賠償金を払うことになるわけだ」

「じゃあつまり、市場には影響がないから問題ないってこと？」

「影響がないだけなら悪は容認されねエよ。実際、市場以外の方面では相当な損害出してつからなア」

「……なら、どこが潤滑油なんだよ？」

「十分な利益になるのさ。じゃあ聞くが、政府の賠償金つてエのはいへりだと思つ？」

「うーん、妥当なところで言えば、それまでの品物の売れ行きを平均化した金額じゃないかな」

クレミーはちらりと口口の反応を窺つたが、対して口口は「チツチツ」と愉しげに指を振った。

「平均？いいや、全額なんだな。すなわち、全ての商品を政府が買い取つたことにしちまうんだよ」

「……なるほど、それは確かに利益になるね」

政府にとつては大損害だけど、と付け加える。

「……つつてもこりやア割とマイナーな方の理由で、実際は、盗賊なんかはいい顧客になるからつてのがテカイかもな。大所帯で泊まれば宿屋が、備蓄食糧の大量買い込みで食品药品店が、武器の調達やら修理やらで鍛冶屋が……なんて具合で市場全体が儲かる仕組みになつてるわけだ」

口口は「満悦な様子で解説をしながら、市街地に足を踏み入れていぐ。クレミーもそれに続き、二人の話に入れないのでシャロンは道端の露店で売られている武道具を物珍しげに眺めながら、一步後ろを付いていった。

「おっす」

ふと思いついたように、口口がすれ違う人々に片手を上げて挨拶をした。彼らは口口の姿を認めるごとに、すぐさま微笑み交じりに会釈を返していった。

「今の知り合い？」

「いーや、俺様は知らね。すげだろ」

「……有名なんだね」

「ヒヤハハ！ どいつもこいつも俺様に恐れおののいてやがるのさ！」

通りを進むこと数分、ゆるやかなカーブを描く道の先に大きな宿屋が見えてきた。どうやら口口はあてもなく散策していたというわけではなく、そこを目指していたらしい。

目的地が分かつて少し安心すると、クレミーは先ほど感じた疑問

を口にする。

「それにしても……変じゃないか？」

「ん？」

「いや、さっきの話の続きをなんだけどね
クレミーが前置きすると、口口は顎で続きを促した。

「確か、政府が賠償金を払つたよな？」

「あア、馬車を出しているのは政府だからな。その代わりにヤシラ
は輸出入に關税を掛け、それを歳入としている」

だつたら、とクレミーは口を尖らせた。

「なおさらだよ。政府は慈善でやつてるわけじゃないんだろ？ 賠
償金なんかできれば払いたくない。じゃあどうして、こんなふうに
我が物顔で街の大通りを歩いている盜賊を捕まえないんだろう、つ
て」

「あー、おまえさんは帝国の皇子だからわからんねエか。簡単に言え
ば、金がないんだよ」

「金がない？」

聞き慣れないワードにクレミーは思わず聞き返した。

「中小街のさだめつてやつだアな。政府が直々に兵力を持てるほど
資金が余っていないんだ。そうだな、よくてボランティアで自警団を
結成しているところがあるくらいか。こりゃア、大体ビリの街でも
一緒だぜ」

「それじゃあ、ソミエみたいな街は盜賊に対し抵抗ができないつ
てこと？」

「いや、その代わりに専門の取り締まり屋がいてだな……つと、噂
をすれば」

「え、何が？」

宿屋はもう田舎の先とこつといひで、口口は不自然に足を止めた。

「わいこ、クレミー」

口口はクレミーの胸に両手を重ねて添えると、ふっと息を入れた。

「うわっ！」

次の瞬間、突風に吹かれたかのようにクレミーの身体が宙を舞つた。「く」の字の姿勢のまま行き交う人々の頭を悠々と飛び越えて、その先のレストランのテラスまで飛ばされる。そのままカッブルの団欒するテーブルに派手に突つ込んだ。

「のわあっ！ 痛たたた！」

運悪くテーブルの角に尻を強かに打つて、クレミーは痛みのあまり、机と椅子の散乱する床を「ごろ」「ろ」と転げ回つた。カッブルや他の客達は何事かと目を瞬かせ、しげしげとクレミーを眺めた。

「すみません、すみませんっ」

それらに平謝りして回りながら、実行犯である口の方向を睨もうとした。

が、そのとき。

キーん、と金属と金属を擦り合させたような耳をつんざく電子音が辺りに鳴り響き、クレミーは反射的に耳を塞いだ。しばらくして残響が消えると、待つっていたかのように拡声器越しの大音声が響き渡つた。

『……あーあー。こほん！ ソミエの市民のみなさま、お騒がせして申し訳ございません！ こちら大陸生活安全管理局治安維持課所屬広域保安官、ミステイ・ミルキーでござります！』

肩書き長いな！ とクレミーは心中で突つ込みつつ、声の主を探す。

『慌てず落ち着いてお聞き下さい！ ただ今、ソミエ一番大通り、宿泊処『憩い屋』旅館前にて、指定盗賊団、赤目盗賊団の一員の姿を確認いたしました！ これより検挙行動を開始いたしますので、市民のみなさまはただちに安全な場所への避難をお願いいたします！』

「おいこら小娘エ！ 僕様は一員じゃなくて団長だア！」

人込みの向こうから口の怒鳴り声がして、大衆がどわっと沸いた。人々は皆、「やれやれまたか」「今度こそ捕まるんじゃないかな」

と口々に一人の掛け合いを揶揄しながら、至極面倒そうに、それでいてどこか楽しげにこの場から立ち退いていった。

クレミーは背伸びをして、洪水のように溢れかえった人々の中からなんとか口口の姿を確認する。次いでその目線の先、「憩い屋」の屋根の上に、メガフォンを持った少女が仁王立ちしているのも発見した。

肩まである髪をきれいに頭の上で団子状に結い上げ、動きやすそうな保安官の制服に身を包んだ彼女は、市民がのろのろと撤退していくのを不満そうに見送つてから、口を開いた。

「また会ったわね、赤目」

静寂が支配する大通りに、ミスティの不敵な声が響く。

口口は呆れ交じりに両手を広げた。

「そりや会うだらうよオ。おめエが俺様を追っかけてきてんだから」とするとミスティは顔を真っ赤にして、

「こ、これは偶然よ！ どうしてあたしがアンタらみたいな小物を追わなくちゃいけないのよ！」

「小物だつてンなら是非とも見逃してくれ」

「それは無理な相談ね。たとえ小物でも点数のためなら……」

喋りながらミスティはプロテクターの付いた革製のグローブを両手にはめて、屋根の端に足を掛けた。ぐつと足を曲げた姿勢で一度口口を見据える。

「潰すのみよ！」

次の瞬間にはそこに彼女の姿はなかった。足場にしていた屋根の瓦が飛び散り、軒下に落下していく。弾丸のごとく飛び出したミスティは瓦礫が地面に着くよりも先に口口の目の前に着地し、間髪入れず足払いを掛けた。

「いてエー！」

剣を抜こうと柄に手を掛けっていた口口は完全に虚を突かれ、体勢を崩した。そこを狙つて、すかさずミスティから高速ソバットが放たれる。

「ンなるつ！」

口口はファルシオンの刀身でそれを防護した。刃がわずかにしなり、彼の両手に痺れが走る。

「チイツ」

口口は舌打ちすると、蹴られた勢いのまま転がり、一度ミステイと距離を取った。

「危ねエな！　いきなり何すんだ！」

「ていやつ！」

口口の抗議には答えずに、ミステイは思い切り地面を踏みつけた。すると突如足場のタイルが爆ぜ、爆発はそのまま生き物のように口口の足下へと連鎖していく。

「無視かよオ！」

それをひょいと横つ飛びに避けた口口は、反撃とばかりに身を低くしてミステイの懷へと飛び込んだ。

至近距離で真横から斬りつけられるファルシオン。しかしひミステイは慌てずに両手を地に付けると、逆立ちの姿勢から足を開き、大きく回転させて、口口の剣を持つ左手に蹴りを当てる。

「ぐあア！」

衝撃に左手が弾かれ、肩の関節が悲鳴を上げる。からうじて剣は手放さなかつたが、完全に無防備になつた口口の顔面へ、もう片方の足が襲いかかる。反射的に口口は背をのけぞらせ、直撃を避けたが、凶器と化した革靴の先端がわずかに鼻先をかすめ、鮮血が舞つた。

「惜しい！」

ミステイの悔しがる声とともに、破碎した瓦礫の上に赤い斑点が飛び散つた。

そのとき。

「うわっ……」

血飛沫が口口の視界に入った途端、彼の顔付きが変わつた。

「が、ア……！」

彼の特徴である赤い瞳は肥大化し、白目を覆い尽くした。腕や顔にはドクドクと脈打つ太い血管がありありと浮かび上がり、大きく開かれた口元からは鋭利極まりない牙のようなハ重歯が覗いている。それはまさに、獣特有の獰猛さと悪魔のよつた残酷さを併せ持つた「人外」の者に他ならなかつた。

「なによ、こわい顔しちゃって……」

謎の豹変に、ミステイは焦りを隠せなかつた。

口口は赤しかない瞳でぎろりとミステイを睨んだ。

「きやつ」「きやつ

すると突然、ミステイの全身に怖気が走り、彼女は思わず尻餅をついてしまつた。

その隙を逃さず、口口は数歩の距離にいるミステイに向かつて、剣で薙いだ。虚空を斬つた剣線は、しかし衝撃波となつて彼女の首を狙う。

まずい！ ミステイはすぐさま我に返ると、かるづじてそれをかわした。ところが、続けざまに放たれた一撃目、二撃目によつて彼女は徐々に追い詰められていく。

このままではやられる、とミステイが立ち上がりかけた時、口口は既に目の前にあり、彼女の首筋を掴んでいた。

「か……はつ！」

そのまま強引に持ち上げられ、自分自身の体重でぎゅうっと首が絞まる。

口口は感情のない瞳をミステイに向けると、首を掴んでいる右手をやや顎の方向へとずらし、左手のファルシオンをゆっくりと持ち上げた。

断頭。

ミステイは酸欠の頭ながらもこれから起これば得る惨劇を想像して、目につつすらと涙が浮かんだ。

うそ、でしょ？ あたし、こんなところで……。

死への恐怖がミステイを縛り付ける。抵抗しようと思えばできる

はずなのに、体から勝手に力が抜けてしまつて、言つことを聞いてくれなかつた。

「へへ……」

口口はわずかに苦しげな呻き声を漏らしたが、ぎゅっと柄を握り直すと、迷わず剣を振るつた。

ところが。

あと少しで刃先が皮膚に到達するところになりで、その隙間に何かが差し込まれた。キン！ という甲高い音とともに、ファルシオンが弾かれる。

「セーフ……」

半ば体を挟み込むような形でバックラーで受け止めたクレミーは安堵の息をつくと、なおも攻撃を続けようとする口口の腹部に鞘を突き刺した。

「うふっ」

口口は空氣を吐き出し、つらそつとその辺りを押さえながら後ろに倒れ込んだ。それによつてミステイも地面に降ろされる。

「今のうちに逃げるよ！」

クレミーは憔悴しきつてゐるミステイの手をとると、本来の目的地であつた憩い屋へと駆け出した。玄関口で女将に適当な理由をつけ、最寄りの部屋に飛び込むと、急いで扉の鍵を閉めた。

「よし……追つてきては……いないみたいだ」

外の様子を窺いながら、ミステイを手近な椅子に腰掛けさせる。

「こほ、こほつ……」

「大丈夫？ ……つて、そんなわけないか。もし本当に苦しかつたら、病院まで送つていくから言つてね」

「え、あの……」

ミステイは突然の事態に戸惑つてゐた。

先程は確かに己の最期を悟つたといつたのに、しかし彼女はこゝで何事もなく生きている。荒い呼吸をしている。一瞬、全てが白昼夢だつたのかとも考えたが、この首の痛みは本物だつた。

ミスティは無意識に首もとをさすつていたらしく、それに気が付いたクレミーが心配そうな声を上げる。

「首、やっぱり痛むかな。痣とかにはなつてないみたいだけど」

「あ……そ、なの……」

なぜだかは分からなかつたが、ミスティはクレミーの顔を直視できずにいた。記憶は定かではないが、おそらくこの黒髪の男に助けられたらしい」とは薄々理解していた。

どうしよう、お礼とか言わなきやだめよね。

「あの……」

「え？」

「名前……は？」

ぼそぼそと喋るミスティにクレミーは首を傾げたが、特に気を悪くした様子もなかつた。

「僕はクレミー・ミルフォード。一応、冒険者かな」

「へえ、クレミーっていうんだ……ふうん……」

ミスティは足下を見つめたまま、小声で呟いた。

つて、ちょっと…？ なんであたし、命の恩人に対してこんな態度しかできないの…？ 超失礼つ！

「君は、えつと、ミルキー・ミスティさん？」

「ミスティ・ミルキーよ…」

「うわっ」

今まで意氣消沈としていたミスティがいきなり大声を出したので、クレミーは驚いて数歩たじろいだ。

「「めん……ミスティさん」

「あつ……一 その、別に、あたしのことはミスティでいい、わよ、で、です……はい……」

「「」もるミスティに、クレミーは微妙に首を傾げたが、すぐに気を取り直して、

「ちょっとじつとしててね」

背負っていた鞄から何かを取り出して、ミスティの足下にしゃが

みこんだ。その手が彼女のふくらはぎに触れた瞬間、

「きやあつ！」

「がつ」

ミステイはクレミーの胸元を思い切り蹴り飛ばした。壁に頭を強打したクレミーの視界に星が散る。

「痛つ……つう……」

「えつ！？　あ、その、今のは……！」

見れば、クレミーが手にしていたのは消毒液と包帯だつた。ミステイは慌ててハーフパンツから覗く自分の足を確認すると、くるぶしに近い辺りからわずかに出血していた。赤目の攻撃は全部避けたと思っていたが、どうやら衝撃波の攻撃がわずかにかすつていたらしい。そして、クレミーはその手当をしてくれようとしたのだと、ミステイは今更ながらに気が付いた。

数々の失態に、ミステイは居たたまれなくなる。

「本当にごめんなさい！　あたし、さっきから失礼なことばっかりして……。も、もう行くわねっ！」

言つが早いかベッドから立ち上がり、戸口へと駆け出すミステイ。しかしクレミーは急いでその前に回り込み、彼女を止めた。

「外は危ないよ。口口がまだ君を狙っているかもしれない」

「あつ……」

徐々に先程の記憶が蘇つてくる。人間らしさの欠片もないあの赤い瞳と、不気味に煌めくファルシオン……。

すると、ミステイはへなへなと膝から床に崩れ落ちそうになる。すんでのどいろでクレミーが体を支え、何とか姿勢を立て直す。

「君はしばらく休んでいた方がいいよ。口口のことは……僕に任せて」

クレミーはミステイに笑いかけると、部屋を出て口口の下へと向かつた。その背中を、ミステイは期待と心配の入り交じった目で見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9067q/>

放浪のプリンス

2011年7月22日03時36分発行